



日本生態学会

No.22

2010年9月

# ニュースレター

## [目次]

第58回日本生態学会大会案内 ..... 1

### 記事

I. 57回大会総会、全国委員会、各種委員会報告承認決議事項..... 9

A. 報告事項

B. 承認事項

C. 決議事項

II. 第57回日本生態学会大会記録..... 21

III. 書評依頼図書..... 25

IV. 寄贈図書..... 26

V. 後援・協賛..... 26

### お知らせ

1. 公募..... 26

2. 国際カゲロウ・カワゲラ学会合同大会開催案内 ..... 26

書評..... 26

日本生態学会役員一覧..... 31

京都大学生態学研究センターニュース ..... 35



## 日本生態学会第 58 回大会案内 -2

日本生態学会第 58 回大会（公式略称 ESJ58）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。この案内は、郵送される文書としては最終的なものですが、プログラムの内容などは随時更新されますので、最新情報は大会ホームページ（<http://www.esj.ne.jp/meeting/58/>）でご確認ください。

### 連絡先

〒 060-0811 札幌市北区北 11 条西 10 丁目  
北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター 気付  
日本生態学会第 58 回大会（ESJ58）実行委員会  
担当：原登志彦（大会会長）、齊藤隆（大会実行委員長）  
電子メール [taikai@mail.esj.ne.jp](mailto:taikai@mail.esj.ne.jp)  
大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/58/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページにある問い合わせページからお願いします。大会に関する最新情報は、ホームページでご確認ください。

### 大会の概要（日程・会場）

本大会は、札幌コンベンションセンターを会場として 2011 年 3 月 8 日（火）から 12 日（土）に開かれ、公開講演会、シンポジウム、フォーラム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会、総会、受賞講演会、懇親会を行います。主な日程は下記のとおりですが、シンポジウム、集会の数によって変更されることがあります。詳細はプログラム、公式ホームページで追ってお知らせしますので、ご確認ください。

- 3 月 8 日（火） 各種委員会、企画集会、自由集会
- 3 月 9 日（水） シンポジウム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会
- 3 月 10 日（木） シンポジウム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、懇親会
- 3 月 11 日（金） 総会・授賞式、受賞講演、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会
- 3 月 12 日（土） シンポジウム、企画集会、フォーラム、自由集会、公開講演会

企画集会、自由集会につきましては、「[企画集会と自由集会](#)」をご覧ください。

大会参加、一般講演、企画集会、自由集会の申し込みは、大会公式ホームページを通じて行って下さい。詳細については、申し込みの流れの項を参照ください。

### 注意事項一重要：講演要旨集の別料金化

大会参加費の軽減化、紙資源の節約などの理由から、今大会でも、講演要旨集の料金は参加費とは別扱いになります。講演要旨集の購入を希望される方は、参加申込みの際に「講演要旨集の購入」についてもあわせて申し込んでください（一般会員：3,000 円、学生会員：2,000 円）。

なお講演要旨集は、大会ホームページで pdf で公開いたします。また HTML 版講演要旨は、日本生態学会第 58 回大会（<http://www.esj.ne.jp/meeting/58/>）のサイトからいつでも自由にご覧いただけます。大会プログラムに掲載されている QR コードから、インターネット接続機能を持った携帯電話等でご覧頂くことも可能です。

講演要旨集の冊子は当日販売も行いますが、数に限りがありますので、先着順の限定販売とさせていただきます。講演要旨集が必要な方は、是非、事前購入していただくようお願いいたします。

講演要旨集の別料金化は、紙資源の節約、大会参加費の軽減などを目的としたものであることを重ねてご理解

ください。

## 参加資格と申し込みの流れ

### 【参加資格】

本大会には、日本生態学会員ではない方も参加いただけます。ただし、一般講演を行ったり、シンポジウム等の企画提案、企画集会等で講演をするには、日本生態学会員である必要があります。「会員」とは、すでに入会し2010年度の会費を納めた方と、2011年度に新たに入会される方を指します。

**入会手続きが終了していない方と、会員であっても2010年度学会費が未納の方は、一般講演の申し込み、企画提案、企画集会等での講演はできません。**未入会の方は入会申し込みを済ませた後、一般講演の申し込みや企画提案を行ってください。会員で2010年度学会費が未納の場合は、納入を済ませてから手続きを進めてください。

### 【入会手続き】

入会手続きについては日本生態学会のホームページ (<http://www.esj.ne.jp/>) をご覧いただくか、下記事務局までお問い合わせください。なお納入の確認までには5日間程度かかることがあります。それぞれの締め切りの充分前に余裕をもって入会手続きや学会費納入を行ってください。入金控えは大会まで必ず保管しておいて下さい。

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

日本生態学会事務局

TEL & FAX: 075-384-0250

(大会に関する問合せは大会公式ホームページを通じてお願いします)

### 【参加申し込み】

大会参加申し込みは、大会公式ページ (<http://www.esj.ne.jp/meeting/58/>) からお願いします。受付開始は10月はじめの予定です。

会員ではない方が大会公式ページから参加申し込みする場合は、「非会員」を選択して登録いただきます。

一般講演を希望する場合は、登壇者（ポスター発表の場合は主たる説明者）が参加申し込みとあわせて講演申し込みを行ってください。締め切りは11月12日（金）の午後5時厳守です。シンポジウム・企画集会の講演は、企画者がまとめて申し込みますので、各講演者は大会参加申し込みのみを行ってください。参加申し込みを済ませないと講演要旨の登録ができませんのでご注意ください。

登録が完了すると大会登録番号が発行されます。この番号は参加費など諸経費の振り込み、要旨の登録、各種問い合わせ、確認メールの再発行などで必要となります。登録時にご自分で設定するパスワードとあわせて、注意して管理してください。参加費については、「諸経費の金額と支払い方法」の項をご覧ください。

なお、大会に参加する方には、「大会規則」、「注意事項」等大会運営に関わる諸規定を遵守していただきます。

大会プログラムは、2011年2月頃に日本生態学会員全員に郵送されます。ただし、学会費未納の場合はその限りではありませんので、プログラムの郵送を希望される会員は、必ず年内に学会費を納入してください。

非会員には、事前に参加申し込みをしても、大会プログラムは郵送されません。大会会場の受付で受け取ってください。大会プログラムは2011年2月頃に大会公式ホームページで公開されますので、ウェブ版もご利用ください。

講演要旨集の購入を希望される方は、大会参加申し込みフォームの要旨集購入希望欄にチェックをお願いします。

## 申し込みなどの締め切り

各種申し込みの締め切りは以下の通りです。

企画集会、自由集会申し込み：	2010年10月22日（金）17:00
一般講演申し込み：	2010年11月12日（金）17:00
講演要旨登録：	2011年1月11日（火）17:00
プレゼンファイル登録：	大会の数日前

各種申し込み開始は、締め切りの1ヶ月前程度から受け付ける予定です。これらのスケジュールに変更がある場合もありますので、適宜、大会ホームページでご確認ください。

## 諸経費の金額と支払い方法

大会参加費（講演要旨集の代金を含みません）

2011年1月11日（火）まで	：一般 会員 8,000円 非会員 9,000円
	学生（会員・非会員とも） 5,000円
大会当日	：一般（会員・非会員とも） 10,000円
	学生（会員・非会員とも） 6,000円

講演要旨集代金（冊子体）

一般 会員・非会員	とも 3,000円
学生 会員・非会員	とも 2,000円

懇親会費

一般（会員・非会員とも）	7,000円
学生（会員・非会員とも）	5,000円

懇親会費には事前登録の割引制度はありません。ご理解下さい。

講演要旨集のみ 3,000円（大会終了後に送付します。事前にご連絡ください）

- ・会員とは、すでに入会し2010年度の会費を納めた方と、2011年度に新たに入会される方を指します。前年度中（2010年1月～12月）に入会申し込みを行い、2011年1月から会員となる「次年入会」も受け付けます。「次年入会」の方も「会員」として扱われます。
- ・学会費と大会参加費は納入先が異なります。混同しないようご注意ください。
- ・日本生態学会の会員手続きにおいて「定収入のない若手会員」と認められた方あるいは手続き中の方は「一般会員」として参加登録し、参加費、懇親会費とも「一般」の金額をお支払いください。「定収入のない若手会員」の参加費、懇親会費は「学生」として扱えるよう準備していますが、受付開始日までに準備が整いません。大会会場でその差額を返金する予定です。返金手続きについては改めて連絡します。

## 諸経費の支払方法

「参加申し込み」を終えた後、大会公式ページ（<http://www.esj.ne.jp/meeting/58/>）にリンクする支払いシステム（JTBのAMARYS）で、諸経費支払方法の選択を行ってください。この際、大会登録番号が必要になります。支払方法は（1）クレジットカード決済、（2）コンビニエンスストア店頭払い、（3）銀行振り込み、の何れかを選んでください。（1）の場合はこのシステム画面で支払手続きを完了できます。（2）と（3）の場合は支払方法の選

択を行った後に、コンビニエンスストアあるいは銀行にて支払をしてください。詳しくは AMARYS システムの画面の案内をご参照ください。

**ご注意** 大会参加費の前納金額は、2011年1月11日（火）までに支払手続きを完了した場合に適用されます。これ以降に手続された場合は当日払いの金額となりますのでご注意ください。

## 企画集会と自由集会

第58回大会では、前回大会と同じ要領で、企画集会と自由集会を募集します。企画集会と自由集会は一括して募集され、受付後に企画者の希望を考慮し、大会企画委員会によって企画集会と自由集会に割り振られます。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込みください。

### 企画集会

- ・企画集会には、大会参加費を支払った人に限って参加できます。
- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・企画集会の他の要件は、自由集会と同じです。一般講演、シンポジウムなどとの**重複発表は認められますが**、原則として日程の調整は行いません。

### 自由集会

- ・自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。しかし、あくまでも関連集会であって、大会の正式行事ではありませんので、自由集会のみの参加者は大会参加者とはみなされません。
- ・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの**重複発表は認められますが**、原則として日程の調整は行いません。

企画集会、自由集会ともに、企画者はC会員を含む日本生態学会会員（A会員とB会員）である必要があります。ただし、企画集会での講演は実行委員会が認めた場合を除いて、A/B会員に限定されます。

企画集会または自由集会の開催を希望される方は、2010年10月22日（金）17:00までに大会公式ホームページからお申し込みください。

いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに特定の個人を傷つける内容を含むと判断されるものについては、その限りではありません。

企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。

企画集会、および自由集会には、3月8日（火）～12日（土）を充てる予定です。なお、自由集会の時間枠は、大会初日の各種委員会や全国委員会と並行した時間帯等に設定される可能性が高くなります。

提案された企画集会・自由集会の数が会場の収容可能数を上まわる場合には、同一会員が重複して複数の集会の企画者となっている提案からご遠慮いただきます。次に、大会シンポジウム企画者による企画集会・自由集会にご遠慮いただきます。それでも数が多い場合には、自由集会は抽選によって採否を決定します。

開催の可否については、11月19日（金）までに企画者にメールでご連絡します。

## フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企

画やフォーラムでの話題提供は、**重複講演制限の対象となりません。**

## 一般講演

一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望（口頭発表かポスター発表）をお聞きしますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。

口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。ただし、英語での発表の申し込み数によっては、分野にこだわらずに英語での発表を集めたセッションに回っていただく場合があります。

発表内容に応じて会場・時間の割り振りやポスター賞のグループ分けを行うため、発表申し込み時に適切な分野を選んでいただきます。一般講演申込のフォームに選択可能な分野一覧が示されます。人数や会場の制約のため、希望された分野で発表できない可能性があります。以下は発表申込のときに示される発表分野（候補）の一覧です。

群落／植物個体群／植物生理生態／植物繁殖／植物生活史／送粉／種子散布／菌類／微生物／景観生態／遷移・更新／フェノロジー／動物と植物の相互関係／進化／種多様性／数理／動物群集／動物繁殖／動物個体群／動物生活史／行動／社会生態／分子／古生態／保全／生態系管理／外来種／都市／物質生産／物質循環／生態学教育・普及／英語（分野は不問）

### 注意：

- ・一般講演の演者（登壇者及び主たる説明者）は、日本生態学会 A 会員と B 会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
- ・一人で二つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、**シンポジウムの企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）。**

これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご理解ください。

## 口頭発表の方法

口頭発表は、会場備え付けの機器を使用したマイクロソフト・パワーポイントあるいは PDF による発表とします。持ち込みのコンピューターは使用できません。発表用ファイルの登録方法などは現在検討中ですが、登録締め切りは大会開始の数日前となる予定です。詳細は、大会ホームページで追ってご案内します。

## ポスター発表の方法

ポスターボードは縦長（90 cm x 210 cm）のものを使用する予定です。ポスター発表は、大会期間中に 3 部に分けて行う予定です。3 部を合計して約 1,200 件のポスター発表を収容できる予定です。ポスター発表の申し込み数が収容可能数を超えた場合は、一部の方に、口頭発表への変更をお願いすることがあります。

## ポスター賞

若手研究者の研究活動を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター賞の審査対象は、ポスター賞に応募した発表に限られます。応募資格については、下記をご参照ください。ポスター発表に関する詳細は大会プログラムに掲載しますので、ポスターを準備するときの参考にしてください。

## 日本生態学会ポスター賞応募資格について

第 58 回大会では、応募資格制限を強め、主たる発表者のポスター賞応募資格について以下の条件を設けます。

1. ポスター賞に応募できるのは、学生、大学院生、学位（学士・修士・博士）取得後（もしくは卒業・修了後）1年までの会員とする。
2. 過去にポスター賞「最優秀賞」または「優秀賞」を受賞した者は、上記の条件を満たしていても応募できないものとする。

応募制限は前回の東京大会から導入しました。近年応募者が急増し、ポスター賞の審査に要する負担が著しく高まったことが理由の一つです。東京大会では、538件のポスター賞応募があり、約130名の方に審査員を引き受けていただきました。審査員の選定作業には、大変な手間と時間を費やしてきました。また、審査員の方々には、大会参加費を払って参加のかたわら、審査時間を捻出して協力いただいています。さらに、ポスター賞を連続受賞する人も多く、より多くの若手研究者へ受賞の機会を与えるべきとの要望が多く寄せられたことも背景にあります。

ポスター賞は、若手研究者への奨励と発表技術の向上を目指すために2002年の仙台大会（第49回大会）に始まりました。多くの方が実感しているように、生態学会のポスター発表のレベルは飛躍的に高まり、当初の目的は確実に達せられていると思います。

一方で、若手研究者の関心がポスター発表に集中し、口頭発表の経験を積む機会が減っているのも事実です。若手研究者には、ポスター発表の次には是非、口頭発表の技術も習得し、さらには英語での発表にも積極的にチャレンジしてほしいと思います。そして何よりも、学会発表した研究を学術論文として公表するよう全力を尽くして下さい。ポスター発表を踏み台にして、研究者としてのステップを高めていければ、本当の意味でポスター賞が機能していることになるでしょう。応募制限の強化には、若手研究者へのこのような期待も込められていることを理解していただければ幸いです。

## 高校生ポスター発表「みんなのジュニア生態学」募集

第58回大会では、東京大会に準じて高校生のポスター発表会「みんなのジュニア生態学」を開催します。

大会会期中に高校生にポスター発表をしていただき、生態学に関連する諸分野の研究者や学生との交流を通して、生態学全般への関心をもっていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。

【日 時】 2011年3月11日（金）13時～15時30分、成績発表・表彰式（16時30分～17時00分）

【会 場】 札幌コンベンションセンター

【参加費】 無料。発表者の全員（人数に制限なし）および付き添いの教員1名は、大会参加費が免除されます。

【発表資格】 高等学校または高等学校に相当する教育機関に在籍する生徒であること。国籍は問いません。

【発表内容】 生態や環境に関わる生物学の内容であれば、なんでも受け付けます。研究成果でなくても、諸活動の計画、現状、または問題点などの中間報告でも結構です。

【発表方法】 本大会の指定するパネルサイズ（90 cm x 210 cm）に納まるポスターであること。発表者（複数可）は、発表時間帯にポスターの説明を口頭で行ってください。

【審査員】 ポスター1件につき複数名の審査員が配置され、質問やコメント、アドバイスをします。

【ポスター賞】 選考委員会が内容を評価し、発表されたポスターは 最優秀賞／優秀賞／審査員特別賞／敢闘賞などとして表彰します。

### ■高校生のポスター発表会「みんなのジュニア生態学」の申込み手順

2010年12月3日（金）までに電子メールで件名に『高校生ポスター発表申込』と記入して、下記の内容を以下のメールアドレスに送ってください。なお発表希望申し込み数が非常に多い場合には、申し込み先着順で打ち切る可能性もあります。早めのお申し込みをよろしくお願いいたします。

発表要旨（日本語で500字以内）は、2011年1月7日（金）までに電子メールで件名に『高校生ポスター発表要旨』

と記入して、メール本文に貼り付けて以下のメールアドレスに送ってください。文字化けの原因となる文字（囲み数字、囲みアルファベット、外字）が含まれていないかを送信前に確認してください。

- (1) ポスター発表のタイトル
- (2) 発表者全員（共同研究者を含む）の氏名、よみがな
- (3) 代表者（または引率教員）の所属
- (4) 付き添いの教員の有無
- (5) 代表者（または引率教員）の連絡先（高校または自宅を明示）：郵便番号／住所／電話番号
- (6) 代表者（または引率教員）のメールアドレス（携帯電話のアドレスは不可）

#### 【送付先／お問合せ先】

大会実行委員会・高校生ポスター発表担当 大原 雅

〒060-0810 札幌市北区北10条西5丁目

北海道大学大学院・地球環境科学研究所・環境科学院

電話／FAX 011-706-4525

E-mail: ohara@ees.hokudai.ac.jp

### 公開講演会「生態系を広く長く調べる：大規模長期研究への招待」

生態系や生物多様性を調べることの重要性をテーマとした公開講演会を以下の日程と予定で行います。

日本生態学会第14回公開講演会

「生態系を広く長く調べる：大規模長期研究への招待」

場 所：札幌コンベンションセンター

日 時：2011年3月12日（土）13:00～17:00

企画者：仲岡雅裕（北海道大）

講 演：中静透（東北大）、三枝信子（国環研）、大手信人（東京大）、藤倉克則（JAMSTEC）、綿貫豊（北海道大）

パネル討論：講演者他

司 会：甲山隆司（北海道大）、日浦勉（北海道大）

### 懇親会

2011年3月10日（木）に京王プラザホテル札幌で懇親会をおこないます。懇親会会場は、地下鉄さっぽろ駅から歩いて5分のところにあります。たくさんの方々のご参加をお待ちしております。

### 託児所

これまでの大会と同様に、大会会場の札幌コンベンションセンター内に託児室を設置する予定です。開設時間や申し込み方法などの詳細は、大会ホームページで追ってご案内します。

### エコカップ2011

大会サテライト企画として、2011年3月7日（月）に「道立総合体育センター北海きたえーる」で、親善フットサル大会 エコカップ2011 が開催されます。主催はエコカップ2011実行委員会です。詳細はホームページ (<http://stellaria.lowtem.hokudai.ac.jp/ecocup/>) でご確認ください。

### 宿泊・交通案内

JTB北海道に委託し、便利な宿泊プラン・航空プランを作成中です。会場となる札幌コンベンションセンター

は札幌中心街から若干離れた場所にあるため、会場へのアクセスが便利なホテルを選定して紹介します。十分な部屋数を事前確保してありますので、予算・日程に合わせて選択するプランとなる予定です。主要空港と新千歳空港間の団体割引を利用した航空プランも計画しています。

会期中の昼食弁当についても事前予約の案内をする予定です。会場内および周辺には食事場所が少ないため、限られた時間の中で昼食を取れなくなる場合が考えられます。このためお弁当の事前予約をされることをお勧めいたします。北海道らしい弁当メニューを検討中です。

詳しくは10月初旬までにホームページ (<http://www.esj.ne.jp/meeting/58/>) に掲載します。またニュースレター2011年1月号にも掲載する予定です。ぜひご利用ください。

## ご意見

大会企画委員会では、大会運営についてのご意見を随時受け付けています。大会公式ホームページにある問い合わせページからお寄せください。

## 記 事

### I. 日本生態学会大会総会（2010年3月18日、参加者約200名）および全国委員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

#### A. 報告事項

##### 1. 事務局報告

##### a. 庶務報告（2009年4月～2010年3月）

1. 日本学術振興会より平成21年度科研費(出版助成金)の内定通知があった(7,100,000円)(4月1日)
2. 文部科学省より平成21年度科研費(公開講演会)の内定通知があった(1,400,000円)(4月1日)
3. 第56回大会にて名誉会員に推挙された田川日出夫氏・阿部永氏に通知し両氏より承諾を受けた(5月15日)
4. 第15回生態学琵琶湖賞受賞者・中村太士氏の授賞式および記念講演が滋賀県公館にて行われ滋賀県知事と学会長連名の賞状が贈呈された(7月4日)
5. 第4期科学技術基本計画及び男女共同参画基本計画への提言について全国委員会にて承認された(8月27日)
6. Ecological Research 出版に係る競争入札の公示をHPにて行い、シュプリング社と2015年まで出版契約することになった(8月31日)
7. 選挙管理委員候補井鷲裕司氏・酒井章子氏・日野輝明氏が全国委員会にて承認された(9月17日)
8. 742名の会員に2009年度会費の再々請求を行った(9月25日)
9. 次々期会長および次期全国委員選挙にて正会員名簿に不備があったため中止し、選挙書類の再送付の上12月10日締切で再投票することを決定した(10月23日)
10. 日本学術振興機構へ平成22年度科研費(学術刊行物)計画調書など申請書類一式を送付した(11月12日)
11. 文部科学省に平成22年度科研費(研究成果公開発表)計画調書など申請書類一式を送付した。(11月13日)
12. 事務局職員1名の募集を行い(10月31日締切)、書類選考・面接の上、橋口陽子事務員の11月24日付での採用を決めた(11月13日)
13. 政府の行政刷新会議における事業仕分けについて文科省に複数学会連名での要望書を提出した(11月19日)
14. 学会賞選考委員に推薦された学会賞・宮地賞候補者が全国委員会にて承認された(11月23日)
15. 団体会員に向けて平成21年度会費請求を行った(11月30日)
16. 2009年会費請求書を個人会員に送付した(12月10日)
17. 選挙管理委員立会いの下、次々期会長および次期全国委員選挙の開票を行った(12月17日)
18. 中静会長指名の常任委員候補8名が全国委員会にて承認された(1月16日)
19. ER電子ジャーナルへのアクセスに必要な個別Tokenを会員に発送した(1月28日)

20. 第8回生態学会功労賞候補者の松本忠夫氏の受賞が全国委員会にて承認された(2月26日)
  21. 全国委員会にて次期 Ecological Research 編集長候補に可直毅氏が承認された(3月3日)
- \*各種集会へ後援・共催の名義使用承諾12件、論文・図などの転載4件。

##### b. 2009年度学会誌発行状況、会員数、会費納入率

(1)学会誌発行部数および配本内訳(2009年12月末現在)

##### 日本生態学会誌 59 巻

	1号	2号	3号
発行部数	3750	3650	3650
配本部数	3609	3580	3582
残部数	141	70	68

##### Ecological Research Vol.24

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	3620	3600	3600	3500	3450	3450
配本部数	3514	3468	3453	3442	3440	3436
残部数	106	132	147	58	10	14

##### 保全生態学研究 14 巻

	1号	2号
発行部数	1400	1400
配本部数	1341	1331
残部数	59	69

##### 配本内訳

	日本生態学会誌 59巻3号		Ecological Research Vol.24 No.6		保全生態学研究 14巻2号	
	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数
一般会員	2511	61	2465	61	1042	20
学生会員	769	143	761	142	199	31
団体	118	0	118	0	31	0
国外個人会員	41	6	36	6	5	0
賛助	1	0	1	0	0	0
小計	3440	210	3381	209	1277	51
名誉会員	5	0	5	0	5	0
寄贈交換	52	0	41	0	50	0
購読	84	0	0	0	8	0
小計	141	0	46	0	63	0
合計	3581	210	3427	209	1340	51

##### (2) 会員数

	2008年12月末現在						2009年12月末現在							
	一般A	一般B	一般C	学生A	学生B	学生C	合計	一般A	一般B	一般C	学生A	学生B	学生C	合計
北海道	193	66	22	83	21	4	389	204	69	21	83	20	1	398
東北	123	46	10	50	6	2	237	126	46	10	61	9	1	253
関東	666	304	84	245	76	9	1384	645	328	80	297	76	10	1436
中部	261	133	29	108	29	4	564	248	134	28	103	35	5	553
近畿	308	156	29	181	39	7	720	307	161	29	171	40	5	713
中四国	152	73	7	78	9	4	310	149	77	7	69	9	3	302
九州	185	61	13	77	15	1	352	181	61	14	73	14	1	344
小計	1888	839	194	822	195	31	3969	1860	876	189	857	203	26	4011
団体				A99	B24	C6	129				A92	B24	C6	122
国外一般							46							53
賛助							1							1
名誉							4							5
小計							180							181
合計							4149							4192

(3) 会費納入率 (2009年12月末現在)

	2008年		2009年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	94.7	59.3	96.3	73.1
東北	93.3	69.0	93.4	78.9
関東	92.0	68.8	90.7	73.1
中部	92.0	70.9	91.2	64.3
近畿	92.7	70.9	91.3	65.3
中四国	90.5	62.6	94.1	67.9
九州	91.5	71.0	90.2	55.7
平均率	92.3	68.2	91.6	69.0

c. 会計報告 (2009年3月～2010年1月)

1. 東京化学同人より生態学入門印税として249,228円の入金があった(3月25日)
2. 第13回宮地賞3名および第2回大島賞受賞者1名へ賞金10万円ずつを送金した(3月30日)
3. シュプリングァー社へER24-1.2出版費として5,510,400円を支払った(4月16日)
4. シュプリングァー社より2008年度売上還元金として899,565円の入金があった(4月27日)
5. 国立情報学研究所よりCiNii機関定額制利用還元金として172,618円の振込があった(5月8日)
6. 土倉事務所へ生態誌59巻1号印刷代として1,712,812円を支払った(5月20日)
7. 自然再生講習会参加費収入として230,000円あった(8月1日)
8. 各地区会へ2009年前期分の地区会費と地区還元金を支払った(9月1日)
9. 土倉事務所へニュースレターNo.18印刷費として380,835円を支払った(7月10日)
10. 土倉事務所へ保全生態学研究14-1印刷費として1,337,700円を支払った(7月10日)
11. 土倉事務所へ生態誌59-2印刷費として2,069,550円を支払った(9月14日)
12. 土倉事務所へニュースレターNo.19印刷費として476,962円を支払った(10月20日)
13. みずほファクターの口座引落しにより434名分の次年度会費4,762,800円の入金があった(12月14日)
14. 盛岡大会実行委員会より残金として3,552,683円が振り込まれた(12月22日)
15. INTECOL2009年会費として377,400円を支払った。(12月25日)
16. シュプリングァーへ2009年3-6号分の出版費として10,896,549円を支払った(12月28日)
17. 土倉事務所へ生態誌59巻3号印刷代として1,705,462円を支払った(12月28日)
18. 土倉事務所へ保全誌14巻2号印刷代として1,546,440円を支払った(12月28日)
19. 2009年度の会計監査が学会事務局で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された(2月4日)
20. 東京化学同人より「生態学入門」印税241,920円の振込があった(1月25日)
21. (株)アライブネットへレンタルサーバ年間利用料として398,000円を支払った(1月29日)

2. 大会企画委員会

1. 東京大会概況
  - ・公式集会数52件(大会シンポジウム19件、フォーラム3件、企画集会31件)
  - ・シンポジウム旅費招待講演者:学会招聘1件、COP10枠招聘1件
  - ・一般公演数1,212件(ポスター発表1009:うち賞応募538、口頭発表203)
  - ・高校生ポスター発表29件
  - ・事前参加申し込み者数1,976人
  - ・非公式集会数18件
  - ・懇親会参加788人(2月11日時点)
  - ・問い合わせ件数136件(3月15日時点)
2. 今期大会企画委員会での実施事項
  - 1) プログラムの充実・要旨集紙媒体の簡素化
  - 2) 高校生ポスター発表担当の新設(札幌大会でも継続)
  - 3) 広報部会の活動:新規企業の獲得 → 次年度は運営部会の広報担当にする。
3. 次期大会企画委員会に向けた検討課題
  - 1) ポスターの発表部門の見直し:発表セクションの統合
  - 2) シンポジウム形式の一部見直し
  - 3) 発表者重複制限の見直し
  - 4) ESJ59でのEAFES対応の検討:運営部会にEAFES担当を置くことにした。
  - 5) 発表キャンセルポリシーの見直し
  - 6) 企画委員会費滞納者を今後どのようにするかという課題が残った。
  - 7) 次期大会企画委員メンバーについて(全国委員会で承認済み)
4. 次期(ESJ57)大会企画委員メンバー  
(新委員の編成については日本生態学会役員一覧参照)
5. 次期大会(JES58)札幌大会 北海道地区大会  
開催日時:2011/3/8-12  
開催場所:札幌コンベンションセンター  
大会会長:原登志彦 大会実行委員長:齊藤隆  
(文責:宮竹貴久)

3. Ecological Research 刊行協議会

1. 事務局報告  
年間投稿数推移

年度	投稿数	通常論文
1998	66	66
1999	106	106
2000	130	130
2001	195	168
2002	166	166
2003	185	169
2004	223	209
2005	341	330
2006	416	362
2007	418	416
2008	439	422
2009	446	433

## 2. 受付論文内訳

受理・却下率 (2009.1.1-2009.12.31 の投稿論文について)

	投稿数	受理	%	却下	%
国内	89	21	23.6	39	43.8
海外	380	64	16.8	245	64.5
合計	469	85	18.1	284	60.6

新規投稿の First Decision までの期間  
(2009.1.1 ~ 2009.12.31)

	Total Decision	%	Average time
Accept as is	0	0	0
Revision	142	30.2	74
Reject	293	62.4	58

## 3. Ecological Research Award 2009 受賞について

受賞論文 (4 編)

### ① pp247-255 (No.2)

Authors: Nobuhiro Akashi

Title: Simulation of the effects of deer browsing on forest dynamics

### ② pp127-136 (No.1)

Authors: Ayato Kohzu, Ichiro Tayasu, Chikage Yoshimizu, Atsushi Maruyama, Yukihiro Kohmatsu, Fujio Hyodo, Yukio Onoda, Akitake Igeta, Kiyoshi Matsui, Takanori Nakano, Eitaro Wada, Toshi Nagata and Yasuhiro Takemon

Title: Nitrogen-stable isotopic signatures of basal food items, primary consumers and omnivores in rivers with different levels of human impact

### ③ pp393-403 (No.2)

Authors: Ryuji Ichihashi, Hisae Nagashima and Masaki Tateno

Title: Morphological differentiation of current-year shoots of deciduous and evergreen lianas in temperate forests in Japan

### ④ pp575-586 (No.3)

Authors: Tohru Manabe, Kenichiro Shimatani, Satoko Kawarasaki, Shin-Ichi Aikawa and Shin-Ichi Yamamoto

Title: The patch mosaic of an old-growth warm-temperate forest: patch-level descriptions of 40-year gap-forming processes and community structures

(文責: 河田雅圭)

## 4. 日本生態学会誌刊行協議会

日時: 2010年3月15日(月曜日) 14:00 ~ 16:00

場所: 東京大学 駒場キャンパス1号館 委員会室5(105教室)

出席者: 堀良通(編集委員長)、北出理(編集幹事)、池田浩明、奥田昇、古賀庸憲、小林剛、近藤倫生、鈴木まほろ、辻和希、野田隆史、中丸麻由子、田中健太、中静透(学会長)、鈴木晶子(編集事務)、天野貴子(土倉)

## 1. 2009年1月-12月投稿状況

投稿数合計 10 受理 5 (但し、連載記事は含めていない)

	原著	総説	特集	学術情報	意見	合計
投稿総数	3	4 (3)	2	1	0	10
受理	2	2 (2)	1	0	0	5
却下	0	0	0	0	0	0
審査中	1	1 (1)	1	1	0	5

(カッコ内の数字は受賞総説)

## 2. 3月号(59巻1号)の進捗状況

・原著論文1本、総説2本、特集1本、学術情報、連載3件を予定している。

## 3. 2011年以降の編集長について

次期編集委員長候補、鈴木英治氏(鹿児島大)が全国委員会にて承認された

## 4. 野外安全管理マニュアルについて

11月に生態誌別冊として発行することになった。マニュアルは学会HPよりオープンアクセス可とする予定(文責: 堀良通)

## 5. 保全生態学研究編集委員会(刊行協議会)

2009年分投稿・編集状況

	原著	総説	実践報告	保全情報	意見	合計
投稿総数	39	3	7	6	1	56
受理	14	2	5	5	1	27
却下・取下げ	7	1	2	1	0	11
審査中	18	0	0	0	0	18

	原著	総説	実践報告	保全情報	意見	合計
動物	17	0	3	5	0	25
植物	19	1	3	1	1	25
その他	3	2	1	0	0	6
投稿総数	39	3	7	6	1	56

2009年: 投稿総数35編、受理27編、却下・取り下げ11編

2008年: 投稿総数43編、受理20編、却下・取り下げ9編

2007年: 投稿総数41編、受理31編、却下・取り下げ9編

\*「保全生態学研究」投稿規定改訂が全国委員会にて承認された。

## 編集方針 保全生態学研究 (Japanese Journal of Conservation Ecology)

は、日本生態学会が定期的に刊行する保全生態学の研究・情報誌である。生物多様性の保全、健全な生態系の維持と再生回復、自然保護、地球環境問題などといった広義の保全生態学の課題にこたえることを目的とした、個体群生態学、群集生態学、生態系生態学、景観生態学、生態遺伝学、進化生態学など、多様な研究アプローチの研究成果を論文や総説として掲載するほか、研究、実務、実践、教育、報道などの諸分野で保全に携わる人々への生態学にかかわる情報交換および意見表明の場を提供することにより、保全生態学の発

展と普及を図ることを目的とする。

**記事の区分** 保全生態学研究は、以下の記事を掲載する。未発表、他誌に掲載予定のないものに限定する。

#### 1. 論文

(1) 原著論文 (Original Article) : 内容は、編集方針に添うものであれば、広く保全に関する生態学的研究やそれとかかわる政策研究なども含める、新たに得た学術的知見をまとめ考察したもの。

(2) 調査報告 (Report) : 絶滅危惧種、侵略的外来種、地域の生物相の危機の現状など、独自の調査に基づいた新知見を報告するもの。

(3) 総説・解説 (Review) : 保全生態学やその周辺分野の課題を取り上げた総説、および保全生態学の研究で用いられる手法などの解説とする。

(4) 実践報告 (Scientific Evaluation) : 保全のための実践活動について、その目的や手法、得られた成果を生態学的見地から評価し報告するもの。七、活動を紹介する記事。

#### 2. 保全情報・意見 (News, Opinion)

生物多様性保全生態学に関するデータや事項の解説的な短報、海外の研究や実践活動の科学的紹介、科学的意見の表明など、保全生態学の発展に資する幅広い情報記事を含む。

(文責：角野康郎)

## 6. 自然保護専門委員会

日時：2010年3月15日(月) 11:30～13:30

場所：東京大学駒場キャンパス1号館114委員会室1

出席委員：佐藤謙、紺野康夫、鈴木孝男、川上和人、和田直也、井田秀行、加藤真、安溪遊地、大田直友、逸見泰久、増沢武弘、竹門康弘、清水善和、久保田康裕、陶山佳久、横畑泰志、村上興正、矢原徹一、立川賢一〔審議事項〕

1. 新委員候補者(任期：2010年3月～2012年3月)が紹介され全員が承認された。専門別委員の専門「IUCN」を「外国渉外」に改名し、外国から広く情報を収集し対処することにした。

2. 新役員として、委員長に矢原徹一委員、副委員長に加藤真委員、幹事に井田秀行委員が選出された。

3. 2009年度活動費支出(371,140円)および2010年度活動費予算(60万円)と支出(3月15日現在、476,353円)が了承された。

4. 「日本生態学会自然保護関連の要望書提出についての覚書」が現状に照らして(資料1)の通り修正された。

#### 5. 要望書(案)

1) 「上関原子力発電所建設工事の中断と生物多様性保全のための新たな調査を求める要望書(案)」が了承され、全国委員会に提出することになった。

2) 「(仮)奄美諸島・加計呂麻島の大規模森林伐採事業の中止を求める要望書(案)」が提案された。地元調査を進め、九州地区会とも連絡し、検討することにした。

6. 上関アフターケア委員会の「瀬戸内海の生物多様性保

全のための第3回三学会合同シンポジウム「上関：瀬戸内海の豊かさが残る最後の場所」(5月1日、山口県光市、開催予定)を自然保護専門委員会で主催(共催)することを了承した。(注：三学会とは、日本生態学会自然保護専門委員会、日本鳥学会鳥類保護委員会、日本ベントス学会自然環境保全委員会のことである。)

7. 自然保護専門委員会名で提出した要望書を学会ホームページに掲載することを事務局に申し入れることにした。

8. フォーラムを委員会としてさらに積極的に活用し、委員会の活動や課題を学会員と共に広範に議論し、理解を深めることにした。

9. 他の学会の自然保護関連委員会との連携をさらに進めることにした。

#### 〔報告事項〕

##### 1. 要望書/パブコメの提出とフォローアップ

1) 「根子岳風力発電計画中止を含む全面的再検討を求める要望書」を6月26日付けで須崎市、長野県、IPPジャパン、環境省に提出したこととその後の反応が報告された。

2) 「中国電力の上関原子力発電所建設計画に対する生物多様性保全の見地からの要望書」を三学会(日本生態学会自然保護専門委員会、日本鳥学会鳥類保護委員会、日本ベントス学会自然環境保全委員会)共同名で中国電力と環境省に2月25日付けで提出した経緯が安溪委員から報告された。

3) 「生物多様性国家戦略2010(案)」に対する意見を1月8日付けで環境省に提出したことが報告された。

2. 委員会の主な活動(2009年3月総会・盛岡から2010年3月総会・東京まで)が報告された(資料2)。

##### 3. 作業部会報告と名簿確認

1) 外来種問題検討作業部会の編集会議((仮)外来生物影響対策ハンドブック)について村上部長から報告があった。

2) 天然林伐採問題検討作業部会の解散について佐藤部長から報告があり了承した。

##### 4. アフターケア委員会の活動報告

1) 上関要望書アフターケア委員会の安溪委員長から前記三学会合同要望書提出と2件のシンポジウム「瀬戸内海の生物多様性保全のための三学会合同シンポジウム、上関 瀬戸内海の豊かさが残る最後の場所」(1月10日広島、3月14日東京)の開催について報告があった。

2) 細見谷要望書アフターケア委員会・安溪委員から大規模林道事業が遠のいた感のあるとの現状報告があった。

3) 尖閣諸島魚釣島ヤギ問題要望書アフターケア委員会の横畑委員長から現状報告があった。

4) 様似・えりも要望書アフターケア委員会の佐藤委員長から、本委員会は役割を終えたので、解散したいとの報告があり、了承した。

5) 上関、細見谷、魚釣島、新石垣空港、淀川問題の各アフターケア委員会から名簿の提出があった。

5. 生態系管理専門委員会の会議内容について竹門委員か

ら報告があった。

#### <資料1>

日本生態学会自然保護関連の要望書提出についての覚書(改訂)

#### (1) 要望書案の起草・提案

##### 1) 全国的な問題(例 法律の改正等に関する要望書など)

自然保護専門委員を含む数名の発起人により原案を起草し、自然保護専門委員会に下記(2)に従って提出すること。

##### 2) 上記1)以外の地区に係る問題

ア. 地区会の議を経て地区会長から自然保護専門委員会へ提案すること。

イ. 地区会の事情で上記アが困難な場合は、少なくとも地区選出の自然保護専門委員およびその地区にいる自然保護委員会専門別委員の了解を得ること(できれば共同提案)。また、地区選出の全国委員および地区会長の了解を得ること。

#### (2) 要望書案の提出期日・アフターケア等

要望書提出の意思表示は生態学会総会の3ヶ月前に自然保護専門委員会と常任委員会に届けることが望ましい。遅くとも1ヶ月前には届けること。

要望書の原案は遅くとも3週間前には自然保護専門委員会に提出すること。

#### 3) 要望書の送付先の原案を作成し提出すること(住所、宛先、人名)。

要望書を提出することとなった場合のアフターケア体制を確認しておくこと(担当委員名など明記)。

要望書に関する添付資料を作成し、加えてその問題に関して説明可能な人物(オブザーバー参加可)を挙げておくこと。

要望書の提出を手渡しで行うか郵送で行うか決定し、提出に関して生態学会事務局および自然保護専門委員会と連絡・確認を行うこと。

後にアフターケアの状況報告を行うこと(次年度大会以降)。

#### (3) 緊急事態または意見公募(パブコメ等)に対する対応

生態学会総会が年に1回しか開催されないため、緊急事態および意見公募(パブコメ等)に対応しきれない場合がある。この場合の措置として、自然保護専門委員会の提案により常任委員会と全国委員会で持ち回り審議した後、学会長名で、あるいは、自然保護専門委員会で審議した後、自然保護専門委員会委員長名で、要望書または意見公募(パブコメ等)に意見等を提出することができる。

2000年3月23日:自然保護委員会決定

2000年3月23日:全国委員会報告

2000年3月25日:第47回大会総会報告

2010年3月15日:自然保護専門委員会で改訂

2010年3月15日:全国委員会で改訂を報告

2010年3月18日:第57回大会総会で改訂を報告

#### <資料2>

自然保護専門委員会の子な活動記録

2009年

6月26日「根子岳風力発電計画の中止を含む全面的再検討を求める要望書」を須坂、長野県、IPPジャパン、環境省に提出

7月25日(根子岳風力発電計画中止決定)

12月20日外来種問題検討作業部会編集委員会開催(東京)

2010年

1月8日生物多様性国家戦略2010(案)意見提出(環境省)

1月10日瀬戸内海の生物多様性保全のための三学会合同シンポジウム「上関:瀬戸内海の豊かさが残る最後の場所」を開催(担当:上関アフターケア委員会)、於:広島・広島国際会議場 国際会議ホール(参加者数約500名)

注:三学会とは、日本生態学会自然保護専門委員会、日本鳥学会鳥類保護委員会、日本ベントス学会自然環境保全委員会のことである。

2月15日「中国電力の上関原子力発電所建設計画に対する生物多様性保全の見地からの要望書」を、日本生態学会自然保護専門委員会、日本鳥学会鳥類保護委員会、日本ベントス学会自然環境保全委員会の連名で、中国電力、環境省に提出

3月14日瀬戸内海の生物多様性保全のための第2回三学会合同シンポジウム「上関:瀬戸内海の豊かさが残る最後の場所」を開催(担当:上関アフターケア委員会)、於:東京・明治大学駿河台校舎リバティホール(参加者数約150名)

注:三学会とは、日本生態学会自然保護専門委員会、日本鳥学会鳥類保護委員会、日本ベントス学会自然環境保全委員会のことである。

3月15日「上関原子力発電所建設工事の中断と生物多様性保全のための新たな調査と対策を求める要望書(案)」を全国委員会に提出した。

3月16日日本生態学会第57回大会においてアフターケア委員会(上関、細見谷、尖閣諸島)がポスター展示予定

3月17日日本生態学会第57回大会においてシンポジウム(S11)「侵略的外来種の防除戦略」を開催予定(担当:外来種問題検討作業部会)

3月18日「上関原子力発電所建設工事の中断と生物多様性保全のための新たな調査と対策を求める要望書(案)」を総会に提出予定

3月19日日本生態学会第57回大会においてフォーラム(U03)「南西諸島生物多様性地域戦略の策定を目指して—生物生態情報データベースの構築・管理—」を開催予定(担当:久保田委員)

(報告:立川賢一)

#### 7. 外来種検討作業部会

日時:2010年3月15日9-11時

場所:東京大学駒場キャンパス114教室

出席者:村上・立川・横畑・石田・江口・中井・石井・森本 傍聴者:清水

議事

1. 作業部会委員

村上（部会長）・池田・横畑・石田・江口・長谷川・太田・松井・中井・細谷・石井・桐谷・森本・五箇・竹門・斉藤・岩崎・立川・角野・鷲谷・富山・可知・増澤・小池

2. 外来生物影響対策ハンドブック（仮称）の編集について  
2009年12月20日に自然環境研究センターで開催した編集委員会の原案を検討し、章構成および主な編集責任者を決めた（詳細は省略）。方針としては下記の通りである。
- 1) 前回のハンドブックの主要な部分の種別事例集は分類群毎の解説書や自然研発行の本などで多くの出版物がある現状を踏まえ、今回は削除する。
  - 2) 日本における外来種の侵入手段と経路ならびにその対策は、今回の主要な内容となるので、第2章の6ではなく第3章として章立てする。
  - 3) これに関してはペット等による人獣共通感染症や寄生生物、あるいは野生鳥獣への伝搬などのことも項目として入れる。
  - 4) 同様に外来種に関する普及啓発は今後重要となるので、第2章7から独立させて第4章と章立てする。その他必要なものは項目として入れる。
  - 5) 地域別事例集をハビタット毎に生態系管理の一貫としての外来種管理という内容で、具体的な事例を集める。現在追加して項目として上がっているのは、水田、里山、琵琶湖の外来水草や外来魚など。これらは外来種を駆除することが目的ではなくその地域の生物多様性を守るために外来種を管理するということを明確化するためである。
  - 6) 外来種のリスク管理に関しても新たに入れる。内容の詰めは今後小池・五箇氏などで行う。導入時の検疫体制なども入れる。
  - 7) 温暖化問題と外来種の関係も全体としては無理でも、高山など具体的な場所で問題となっているケースを入れることを検討する。
  - 8) 章や節で扱いきれない問題だが重要なことはコラムを作りそこで簡略に記述する。どのようなコラムが必要かは今後検討する。
  - 9) 全体のまとめとして今後の外来種管理のあり方に関する章を設ける。
  - 10) スケジュールや編集体制などは村上・岩崎・中井・石井等で詰める。  
事例集なので会員の協力を得て全国的によい事例の情報収集を行い、今後役に立つものとする。

（文責：村上興正）

## 8. 将来計画専門委員会

「重要な報告事項」

1. キャリア支援専門委員会（仮称）の新設  
目的：生態学会における若手研究者支援や男女共同参画等の人材育成に関する活動を行う。  
委員長：半場祐子常任委員
2. 将来計画専門委員会の再編  
将来計画専門委員会は、中長期的視野で、生態学の学術的発展や社会との関係など、生態学関連分野の将

来計画を広く「調査・研究」し提言する委員会として、再編する。

新委員長：辻和希（学術会議連携会員）

「新年度の計画」

1. 将来計画専門委員会の再編
2. 生態学会と生態学の中長期的将来計画
3. 若手支援・男女共同参画関連（キャリア支援専門委員会（仮称）に引き継ぐ）
  - ・「女子中高生夏の学校」（8月）に協力（「野外観察」を担当）
  - ・第8回男女共同参画シンポジウム（10月）に学会として参加
  - ・札幌大会2011で若手支援・男女共同参画推進に関するフォーラムを開催

（文責：可知直毅）

## 9. 生態教育専門委員会

1. 次期学習指導要領解説の研修シンポ（全国行脚）
  - ・嶋田が文部科学省学習指導要領作成協力者に加わっていたため、文部科学省・田代直幸教科調査官と主査・松浦克美教授（首都大学東京）とともに、次期学習指導要領解説の研修シンポを実施した。
  - ・東京（2009年10月12日）→大阪（2009年10月30日、生態学教育専門委員会の中井委員、廣瀬委員も協力）→福岡（2009年11月3日）→岡山（2009年12月13日）→仙台（2010年1月9日）→名古屋（2010年2月14日）と回った。各会場では、100~300名の聴講者を集め、盛会であった。
2. 合宿会議の開催
  - ・2009年12月19日~20日に東大農学部6号館1階会議室で開催した。
  - ・「生態学実習指針書」の編集体制、「高校生のポスター発表会」の審査体制などを検討した。
3. 「生態学実習指針書」の編集開始
  - ・「生態学実習指針書」は嶋田委員長多忙のため1年間編集が進まなかったが、新たに山村委員と廣瀬委員を中心に、編集体制を組み直し、再開することにした。
  - ・すでに、当委員会を中心に、テーマの提案、査読・改訂が始まっている。
4. 第57回大会（東京）での「高校生のポスター発表会」試行
  - ・生態学教育専門委員とポスター部会との連携で試行する。
  - ・「高校生のポスター発表会」の審査は、ポスター部会の審査体制とは別に、生態学教育委員会を中心に人選した（東京大学・大学院総合文化研究科の特任研究員、学振・特別研究員など）。これに当委員会でも当日に参加可能な委員（6名）が加わって、11名体制で当たることになった。
  - ・父母・学校関係者からの見学希望があったので、ポスター会場での受付窓口に「見学」という名札タグを設けて、大会参加費を徴収せずに見学できるようにした。
  - ・2009年12月の常任委員会では、札幌大会でも引き続き「高校生のポスター発表会」を実施することになっ

た(2011年3月12日午前を予定とのこと[札幌大会実行委員長より])。

(文責: 嶋田正和)

## 10. 生態系管理専門委員会

2010年3月15日 東京大学大学院総合文化研究科(委員会室2)

出席者

竹門康弘、矢原徹一、加藤真、角野康郎、向井宏、塩坂比奈子、津田智、佐藤利幸、日鷹一雅、高村典子、中越信和、神田房行、鎌田磨人、國井秀伸、西廣淳、逸見泰久(オブザーバー)(16名)

[報告事項]

### 1. 自然再生ハンドブック

2010年度の自然再生講習会での配布を目標に校正段階に入っている(地人書館から出版予定)。COP10で予定されている生態学会のブースでも宣伝する。

### 2. 自然再生講習会

自然再生講習会を以下の通り予定通り開催した。「日本生態学会自然再生講習会 第一回『あなたにもできる自然再生:生態学の視点から』」

2009年8月1日 東京大学農学部1号館8番教室  
一般参加者114名、運営スタッフ・講師10名、合計124名

収支報告

収入合計	228,000 円
(参加費 2,000 円×114人)	
支出合計	199,818 円
残額	28,182 円

### 3. 自然再生事業現地ヒアリング

2009年9月29日(火)麻機遊水地(静岡市)(自然再生推進法に基づく事業地)  
参加者:竹門、角野、行政(静岡県、静岡市担当者)、再生協議会メンバー(約20名)  
現地視察と意見交換(質問書をあらかじめ提示)を実施した。

### 4. 自然再生講師派遣

2009年度派遣:津田委員、三橋弘宗(兵庫県大)  
平成21年度水戸市環境フォーラム「自然再生講習会:水戸市中心部のゆたかな自然を保全しよう」  
2010年2月21日 日曜日 茨城県立図書館視聴覚ホール

主催:水戸市環境保全会議、共催:茨城県立図書館、後援:水戸市環境課  
協力:日本生態学会生態系管理専門委員会

### 5. 北京エコプロ WG

中国における砂漠化対策としての緑化プロジェクトに関する検討会に参加。  
2009年12月4-5日 門頭溝2009生態建設検討会に参加し意見交換を行った。  
ワーキンググループメンバー:嶋田委員、津田委員、中村徹(筑波大学)、川田清和(筑波大学)

[審議事項]

### 6. 委員人事

(新委員の編成については日本生態学会役員一覧参照)

### 7. 役員人事

2010-2011年度の役員として以下の3名が推薦され、承認された。

(委員長)竹門康弘、(副委員長)津田智、(幹事)西廣淳

### 8. 2010年度活動方針

#### ①自然再生講習会の開催

・2009年度の第一回講習会の際のアンケート結果を参考にし、2010年度中10月以降に開催する(担当:西廣)。

#### ②自然再生現地ヒアリング

・静岡市・巴川流域麻機遊水地自然再生事業への取材・助言活動を継続する(担当:竹門、角野)。  
・取材・助言活動の対象とすべき事例の情報を収集し、ワーキンググループ(委員会以外にもメンバーを募る)形成して対応する。

#### ③海外の関連事業への対応

・北京エコプロジェクトへの助言活動を継続する(担当:津田、嶋田、中越)。  
・同様な要請があれば、ワーキンググループ(委員会以外にもメンバーを募る)形成して対応する。

#### ④英文パンフレット

・COP10など国際的な場で委員会の活動を紹介するためのパンフレットを作成する(担当:鎌田、椿、矢原)。  
COP10関連行事でブースを設けて配布・解説を行う(企画担当:佐藤)。

### 9. 2010年度予算

収入の部

日本生態学会予算からの収入	
専門委員会経費	150,000 円
委員会活動による収入	
自然再生講習会参加費	200,000 円
自然再生講習会繰越金	28,182 円

支出の部

現地視察旅費(学会予算から)	150,000 円
自然再生講習会開催費用	228,182 円

(文責:竹門康弘)

## 11. 大規模長期生態学専門委員会

Ecological Research Data Paper

・9月までに投稿規定、ハンドリング体制などを整備して受け入れ開始  
・データはJaLTERのデータベースに格納  
・本委員会から associate editor, handling editor として参加

JaLTER 新規登録サイト(計コアサイト17、準サイト30に)

- 琵琶湖流域研究サイト(準サイト、京大大学生態学研究センター・滋賀県琵琶湖環境科学研究センター)
- 木曾川流域研究サイト(準サイト、京大大学生態学研究センター)
- 相模湾(深海)(コアサイト独立法人海洋研究開発機構海洋・極限環境生物圏領域)

その他

- ・ 来年生態学会公開講演会、大規模長期生態学研究をテーマに
- ・ 2011年8月か9月にILTER-CCを札幌近郊で開催、エクスカーション苫小牧研究林
- ・ GEOS-AP、GEO-BON、CBD-COP-10との連携
- ・ GLP 5月地球惑星科学連合大会他、Sapporo Nodal Office生態系サービスに関するサマースクール開催
- ・ CTFSが温帯域にも大面積プロットのネットワーク構築を模索  
気象庁・環境省温暖化観測連携拠点第2次報告書発刊  
(文責：日浦勉)

## 12. 野外安全管理委員会

1. 2009年度活動内容の報告
  - ・ 野外安全管理マニュアルのとりまとめと出版に向けた交渉を行った。
  - ・ 出版社との交渉は不調に終わり、日本生態学会誌上での発表に向けて検討いただいている。
2. 2010年度活動の予定
  - ・ 野外調査安全管理マニュアル出版  
日本生態学会誌の3号での出版が認められることを仮定して、原稿の改訂を進めることになった。
  - ・ 2011年札幌大会でのフォーラム  
次年度の大会において、野外調査の安全対策の啓発のためのフォーラムを企画することとなった。可能であれば、なるべく多くの大会参加者に訴えられるような形式での開催を希望している。  
(文責：鈴木準一郎)

## 13. 学術会議

統合生物学委員会／生態科学分科会報告

- 1) 「温暖化問題解決のために一知見と施策・分析、我々の取るべき行動の選択肢」報告が学術会議HPに公開された。
- 2) 「応用生物学委員会」の名称が「統合生物学委員会 (Integrative Biology)」に変更された。自然史、生態、Bioinformaticsなどの学会が参加。
- 3) 2009年11月3日に「サイエンスアゴラ」での学術会議フォーラムにおいて「統合生物学がめざすもの」を開催した。
- 4) 「COP10 (生物多様性条約第10回締約国会議) との連携。生物多様性をアピールするための講演会を統合生物学委員会で企画。また「提言」を準備中。
- 5) 名古屋市主催の「科学と社会の対話フォーラム」が2010年8月に名古屋で開催され、応用生物学委員会メンバーが出席した。
- 6) 環境省の渡辺綱男課長 (環境省自然保護局自然環境計画課)、鳥居敏男センター長 (環境省生物多様性センター長)、堀内洋室長補佐 (環境省自然保護局地球戦略企画室) から、COP10に向けた環境省の取り組みに関してヒアリングを行った。
- ・ 生物多様性条約 (CBD) が1992年に締結されたが、多様性減少に歯止めをかけるという当初の2010年目標は達成困難な状況。そこで、COP10では、今後の方針を

- 議論し、新しい目標を設定することが目標である。
  - ・ G8のシラクサ宣言があり、COP10は2010年9月に首脳会議がある。
  - ・ 生物多様性版IPCCはフランス中心に、UNEPを引き継ぐ形で結成。
  - ・ CBDは2010年2月に草案を作り、各地に送る。
  - ・ GBMNI、地球規模生物多様性モニタリング
- 7) 第一回JBONワークショップ報告 (矢原委員)
    - ・ 2008年、DIVERSITAS科学委員会と環境省の専門家会議、preconference (予備会議) の準備会合に出た。それを踏まえて研究者のキーパーソンに集まってもらって第1回JBONワークショップを2009年5月8～10日に東京大学駒場キャンパスで開催し約250人が参加した。そこでJBON委員会を結成し、行動計画を発表した。また、ポスト2010年目標のための研究者WGを設置し、松田裕之次期会長に世話役をしてもらっている。Asian Biodiversity Outlookのような本を出版する。日本が持っているアジアのデータを明らかにしたい。
  - 8) 次期の学習指導要領における生態・進化の扱い  
「高校生物」の学習指導要領 (2008年12月公開、2012年4月から施行)の改正点について報告があった。生態・進化について、かなり多くの内容が盛り込まれることになった。
  - 9) 大学における生態・自然史研究施設の現状調査  
野外教育研究施設の置かれている状況について、資料をもとに松本委員長から報告があった。演習林は新しい体制となり、フィールド研究ステーションを名乗るようになった。臨海実験所はアウトリーチがあり、発生の教育の場となっていることが多い。全国共同利用施設のシステムが2008年に変わり、共同利用施設として認められないと国からの補助が受けられなくなった。学内のサポートが受けにくくなっており、学内付置研の存続が困難になっている。長期観測のデータを絶やさないと非常に重要である。また、フィールドの研究拠点としての存続やデータの連続性が重要である。
  - 10) 「日本の展望—学術からの提言2010」報告書を取りまとめ中 (4月6日公表予定)。その中には、「生命科学における第一の課題として生物の多様性の尊重を挙げる」と、生物多様性の重視について言及されている。「科学技術」から「科学・技術」へ。
  - 11) 第4期科学技術基本計画への日本学術会議の提言」のとりまとめが最終段階にある。この提言によって、政府の科学技術基本計画の中に、生物多様性や生態系からの視点が反映されることを期待している。
  - 12) 統合生物学委員会「生物多様性の保全と持続可能な利用：学術分野からの提言」を取りまとめ中。各分科会にも意見を求めたのち、2010年3月10日にプレス公表予定。提言の主な内容は下記のとおり。
    - (1) 生物多様性の損失は、速度を抑えるところか加速の一途を辿っており、実効性の高い施策が緊急に必要
    - (2) 温暖化対策と多様性保護が連動することの重要性
    - (3) 動的な環境における適応進化などを含む長期的なデ

- ータなど、社会に有用なデータを提供することの重要性
- (4) 研究者の絶対的不足、人材養成の重要性
- (5) 研究標本・試料の維持が困難な状況
- (6) 人間至上主義からの脱却
- (7) 生物多様性と生態系の危機、環境モラルや環境リテラシーの構築、自然史や生態学などの初等教育の重要性
- (8) GBIF、JBON、DIVERSITASなどで、日本がアジアでイニシアティブをとることの重要性
- (9) 自然史系博物館の意義、大学との連携、研究機関の全国ネットワークなど
- 13) 統合生物学委員会の活動予定  
2010年5月22日(国際生物多様性の日)に豊岡のコウノトリの里において、「生物多様性をめぐる科学と社会の対話」集会(共催:新潟大学トキプロジェクト、名古屋 COP10、兵庫県環境情報協会、豊岡市(高校生100名も参加)、環境省、IUCN)を開催予定

- 14) 大学における生態・自然史研究施設の現状に関するアンケート調査(別紙)  
・向井委員が中心となった作成したアンケートを、分科会委員長名で2月5日に約160機関に送った(締め切り3月5日)。  
・アンケート結果の報告書は、日本生態学会で印刷する道を探りたい。日本生態学会の将来計画委員会や大規模長期調査委員会に協力要請。  
アンケートの取りまとめに基づいて「提言」をまとめる。
- 15) 持続可能な社会のための科学と技術に関する国際シンポジウムで生物多様性をテーマにとりあげて2010年12月16-17日に開催(実行委員長:鷺谷)
- 16) 大型施設・大型プロジェクトに関する検討委員会  
生物多様性ホットスポット研究も提案。大規模長期専門委員会も対応。

(文責:松本忠夫)

## B. 承認事項

### 1. 2009年度決算

#### 一般会計

収入の部			支出の部		
	09 予算	09 決算		09 予算	09 決算
会費			会誌発行費		
一般会員	31,000,000	31,317,960	ER	19,200,000	20,023,281
学生会員	7,000,000	6,770,800	生態誌	5,000,000	4,823,344
外国会員	350,000	387,100	保全誌	2,400,000	2,149,530
団体会員	2,500,000	2,450,000	ニュースレター	1,200,000	1,140,772
賛助会員	20,000	20,000	和文誌発送費	450,000	0
和文誌購読	650,000	743,900	編集費	100,000	70,114
小計	41,520,000	41,689,760	小計	28,350,000	28,207,041
ER 売上還元金	1,000,000	899,565	会議費	150,000	91,534
Back No. 売り上げ	40,000	45,500	旅費・交通費	2,200,000	2,461,801
科研費	8,250,000	8,500,000	人件費	13,300,000	12,536,066
出版印税	480,000	495,936	地区会へ還元金	1,520,000	1,514,300
利子収入	50,000	21,544	大会支出	16,000,000	15,372,244
広告代	0	120,000	公開講演会	500,000	0
著作権使用料	160,000	361,089	INTECOL 会費	380,000	370,400
ER 超過ページ代	400,000	1,058,000	事務費		
大会収入	16,000,000	18,724,927	通信費	800,000	844,150
講習会費	200,000	230,000	消耗品費	300,000	305,570
前年度繰越金	28,232,668	28,232,668	雑費	300,000	282,822
			銀行手数料	130,000	132,765
			レンタルサーバ料	403,000	403,000
			事務所賃貸料・電気代	1,680,000	1,680,000
			会計監査(税理士)	378,000	378,000
			小計	3,991,000	4,026,307
			各種委員会費	1,000,000	617,480
			選挙費	400,000	1,751,135
			EAFES 費用	100,000	52,110
			講習会費		199,818
			次年度繰越金	28,441,668	33,178,753
合計	96,332,668	100,378,989	合計	96,332,668	100,378,989
単年度収入	68,100,000	72,146,321	単年度支出	67,891,000	67,200,236

特別会計Ⅰ（宮地基金）

収 入 の 部			支 出 の 部		
	09 予算	09 決算		09 予算	09 決算
前年度繰越金	3,705,852	3,705,852	宮地賞賞金	300,000	300,000
預金利息	0	2,625	振込手数料		2,520
			次年度繰越金	3,405,852	3,405,957
合 計	3,705,852	3,708,477	合 計	3,705,852	3,708,477

大島基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	09 予算	09 決算		09 予算	09 決算
前年度繰越金	9,827,792	9,827,792	大島賞賞金	100,000	100,000
預金利息	0	7,039	振込手数料		840
			次年度繰越金	9,727,792	9,733,991
合 計	9,827,792	9,834,831	合 計	9,827,792	9,834,831

琵琶湖賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	09 予算	09 決算		09 予算	09 決算
前年度繰越金	1,287,160	1,287,160	旅費	200,000	185,270
寄付金	0	42,500	その他諸費用	0	35,859
預金利息	0	604	次年度繰越金	1,087,160	1,109,135
合 計	1,287,160	1,330,264	合 計	1,287,160	1,330,264

2. 第 59 回大会開催地

59 回大会は近畿地区会が担当し、2012 年 3 月に大津にて行うことが承認された。

3. 第 60 回大会（2012 年）担当地区会

第 60 回大会は中部地区会が担当することが承認された。

C. 審議事項

1. 2010年度予算案について

2010年度予算案が決議された。

一般会計

収入の部			支出の部		
	09 決算	10 予算		09 決算	10 予算
会費			会誌発行費		
一般会員	31,317,960	31,000,000	ER	20,023,281	20,000,000
学生会員	6,770,800	7,000,000	生態誌	4,823,344	5,200,000
外国会員	387,100	350,000	保全誌	2,149,530	2,400,000
団体会員	2,450,000	2,400,000	ニュースレター	1,140,772	1,200,000
賛助会員	20,000	20,000	和文誌発送費	0	0
和文誌購読	743,900	700,000	和文誌編集費	70,114	100,000
小計	41,689,760	41,470,000	小計	28,207,041	28,900,000
ER 売上還元金	899,565	1,000,000	会議費	91,534	100,000
編集事務費用 (シュプリンガーより)		1,750,000	旅費・交通費	2,461,801	2,500,000
Back No. 売り上げ	45,500	40,000	人件費	12,536,066	13,300,000
科研費	8,500,000	8,500,000	地区会へ還元金	1,514,300	3,200,000
出版印税	495,936	400,000	大会支出	15,372,244	18,000,000
利子収入	21,544	20,000	公開講演会	0	1,400,000
広告代	120,000	120,000	INTECOL 会費	370,400	380,000
著作権使用料	361,089	200,000	事務費		
ER 超過ページ代	1,058,000	400,000	通信費	844,150	850,000
大会収入	18,724,927	18,000,000	消耗品費	305,570	250,000
講習会費	230,000	200,000	雑費	282,822	300,000
前年度繰越金	28,232,668	33,178,753	銀行手数料	132,765	140,000
			レンタルサーバ料	403,000	403,250
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務報酬	378,000	378,000
			小計	4,026,307	4,001,250
合計	100,378,989	105,278,753	各種委員会費	617,480	1,000,000
単年度収入	72,146,321	72,100,000	選挙費	1,751,135	0
			EAFES 費用	52,110	100,000
			名簿作成	0	0
			講習会費	199,818	200,000
			次年度繰越金	33,178,753	32,197,503
			合計	100,378,989	105,278,753
			単年度支出	67,200,236	73,081,250

特別会計 I (宮地基金)

収入の部			支出の部		
	09 決算	10 予算		09 決算	10 予算
前年度繰越金	3,705,852	3,405,957	宮地賞賞金	300,000	300,000
預金利息	2,625	0	振込手数料	2,520	2,520
合計	3,708,477	3,405,957	次年度繰越金	3,405,957	3,103,437
			合計	3,708,477	3,405,957

大島基金

収入の部			支出の部		
	09 決算	10 予算		09 決算	10 予算
前年度繰越金	9,827,792	9,733,991	大島賞賞金	100,000	0
預金利息	7,039	0	振込手数料	840	0
合計	9,834,831	9,733,991	次年度繰越金	9,733,991	9,733,991
			合計	9,834,831	9,733,991

琵琶湖賞基金

収入の部			支出の部		
	09 決算	10 予算		09 決算	10 予算
前年度繰越金	1,287,160	1,109,135	旅費	185,270	0
寄付金	42,500	0	その他諸費用	35,859	0
預金利息	604	0	次年度繰越金	1,109,135	1,109,135
合計	1,330,264	1,109,135	合計	1,330,264	1,109,135

2. 定収入のない若手会員の学会費を学生会員と同額にすることについて

[趣旨]

若手研究者の就職は生態学会にとって大きな問題だが、期限付きの職にも就くことができず、収入がかなり低い若手会員は少ない。

そのような会員にとって、学会費の負担はかなり重いものであるとの声も寄せられている。若手支援の1つとして、そのような会員の学会費を学生会員と同額にすることを提案する。

[提案内容]

期限付きの職にもついておらず収入が少ない、40歳未満の会員について、翌年の会費を学生会員と同額にする。収入については200万円以下とする。年齢については会費の年度の1月1日現在とする。

具体的には、10月の指定した締め切りまでに（具体的には会費の納入事務上可能な日程を決める）、収入に関する書式と申請書（いずれも事務局で用意）を提出した、滞納のない会員の翌年の会費について適用する。

収入の証明に付いては、指導教員あるいはそれに準じる人が署名した書式（事務局で用意）でよいものとするが、公的な収入証明でもかまわない。

2011年度の会費（学会費は前納制であるため2010年の終わり頃に請求が来る）から実施する。

[説明]

若手に限らずに適用することも考えられるが（他の学会ではリタイアした会員については会費を安くしている例がある）、若手については差し迫った問題になっていると考えられるので、今回の総会で若手についての措置をスタートさせ、その他の会員への同様な措置に付いては引き続き検討して行く。

事務的な点では、いったん納入された会費の一部を返金するという事務を最大限避けたいと考えて提案内容のような手順とした。

一般会員の中の条件に該当する人の会費の額を変えるだけで、権利義務などに変化を生じるわけではないので、会則改正は必要でない。会費年額は会則中に記されている事項ではないが、附則の定めにより、総会決定事項である。

【関連する規定】

会則

第4条 「会員」本会の会員は正会員（一般、学生）(A, B, C)、団体会員 (A, B, C)、賛助会員、名誉会員とする。  
i) 正会員は本会の趣旨に賛成し、所定の入会手続きを

経て、所定の会費を納める個人。

<第4条 以下省略>

付則

第1条 会員の会費は前納とする。会費年額は総会の議を経て決定し、会誌に明示する。

3. 要望書

自然保護専門委員会からの要望書1件を決議した。

上関原子力発電所建設工事の中断と生物多様性保全のための新たな調査と対策を求める要望書

提出先：中国電力、山口県、上関町、環境省、文部科学省、国土交通省、経済産業省

第10回生物多様性条約締約国会議開催国として、日本政府は生物多様性損失を止めるための施策を推進する立場を国際的に表明している。この立場に基づき、国内に残る生物多様性ホットスポットの保全に責任を負う必要がある。この点で、瀬戸内海における生物多様性ホットスポットである周防灘海域の保全は国際的に見て対策が急がれる課題である。

この海域に位置する山口県上関町長島において、中国電力株式会社（本社：広島市）が原子力発電所の新設を計画している。ここで実施された環境影響評価は、多数の希少種や、絶滅危惧種（ハヤブサ・カンムリウミスズメ・スナメリ・ナメクジウオ・ヤシマイシン近似種・カサシャミセンなど）とそれを含む生態系に与える影響を評価していない点で、不十分なものであった。そのため、日本生態学会は、2000年3月と2001年3月の2度の総会において要望書を決議し、生物多様性の保全と、科学的な環境影響評価を実施することを求めた。その後も自然保護専門委員会および中国四国地区会を中心に要望を重ね、これまでに合計8件（うち1件は日本鳥学会鳥類保護委員会・日本ベントス学会自然環境保全委員会と共同）の要望書、決議書等を、事業者および監督官庁に提出してきたところである。

これらの要望書は、しかしながら、事業者からも監督官庁からも全く無視され、2008年10月に山口県知事が中国電力に対して海域埋め立て免許を出し、今まさに海域埋め立て工事が着工される寸前に至っている。事業そのものに対する国の認可が出ていないにもかかわらず、すでに、陸上部分では、取り付け道路の整備などの名目で相当規模の山林伐採が進んでいる。海中でも、ボーリングなどの詳細調査の段階から、浮泥の堆積によって海生物相の劣化や死滅が観察されている。

最近、当該予定地からは、希少な鳥類であるカラスバト（国指定天然記念物）、カンムリウミスズメ（国指定天然記念物、絶滅危惧Ⅱ類）、ウミスズメ（絶滅危惧ⅠA類）、オオミズナギドリ（山口県準絶滅危惧種、内海の繁殖地としては他に例がない）の生息・繁殖が相次いで確認された。この知見は、これまで知られていた海産無脊椎動物、海藻類、水生哺乳類などにおける豊かな生物相と合わせて、この海域の生態系全体の生物多様性が、大変良好に保持されていることを示している。

この海域は、瀬戸内海に最後に残された生物多様性のホットスポットであり、しかも、豊後水道に続いているとはいえ、海水が滞留しやすい内海である。この計画がもし押し進められてゆくなれば、今までかろうじて残されてきた周防灘の生物多様性と生態系が著しく損なわれることになり、それはまた、瀬戸内海の自然の再生可能性を失うことにもつながる。

このような状況を踏まえて、日本生態学会は以下のことを要望する。

1. 日本国政府は、本年10月に名古屋市で開催される第10回生物多様性条約締約国会議の議長国として、上関周辺海域を含む瀬戸内海の環境保全を国家戦略の中に明確に位置づけ、適切な対策を実施すること。具体的には、上関周辺海域を含む瀬戸内海の総合的な学術調査を新たに実施すること。
2. 中国電力は、上関原子力発電所建設計画にかかわるすべての工事を一時中断し、当該海域の生物多様性に関する環境省主導の公正な調査の実施に協力すること。また、当該海域が瀬戸内海の生物多様性ホットスポットであるという事実を照らして、本計画の是非を再検討すること。

以上決議する。

2010年3月18日  
日本生態学会第57回大会総会

## II. 第57回日本生態学会大会の記録

第57回日本生態学会大会（JES57）は、東京大学（教養学部/大学院総合分化研究科/安田講堂）を会場として2010年3月15日～3月20日に開催されました。

大会期間中に公開講演会1、シンポジウム19、フォーラム3、企画集会31、自由集会15、一般講演（口頭発表）203、一般講演（ポスター発表）1009（うち高校生ポスター29）、が行われました。参加者は2,156名でした。5日間の日程とポスター賞（日本生態学会公認表彰）受賞者は以下の通りです。

### 日 程

- 3月15日 各種委員会（大会企画委員会、日本生態学会誌刊行協議会、Ecological Research 刊行協議会、保全生態学刊行協議会、将来計画専門委員会、生態学教育専門委員会、外来種検討作業部会、自然保護専門委員会、生態系管理専門委員会、大規模長期生態学専門委員会、野外安全管理委員会）、全国委員会、フォーラム、自由集会
- 3月16日 シンポジウム、一般講演（口頭発表）、一般

講演（ポスター発表）、企画集会

- 3月17日 シンポジウム、一般講演（口頭発表）、一般講演（ポスター発表）、高校生ポスター発表、懇親会
- 3月18日 総会、各賞授賞式、受賞講演、一般講演（ポスター発表）、企画集会
- 3月19日 シンポジウム、フォーラム
- 3月20日 公開講演会、エコカップ2010（親善フットサル大会）

ポスター賞受賞者<菌類微生物>

最優秀賞

- 堤正純（北大・低温研）、小島久弥（北大・低温研）、岩田智也（山梨大・工学部）、福井学（北大・低温研）  
成層したダム湖における浮遊性メタン酸化細菌の群集構造

- 藤井正典、小島久弥（北大・低温研）、岩田智也（山梨大・工）、占部城太郎（東北大・生命）、福井学（北大・低温研）

淡水湖沼において環境要因が浮遊性細菌群集構造に及ぼす影響

優秀賞

- 根本富美子、小島久弥、福井学（北大・低温研）  
オコタンペ湖に生息する大型糸状性細菌 *Thioploca* の諸特性

<群落>

最優秀賞

- 中山智絵、鈴木真理子、堀良通（茨城大・理）、安田泰輔、中野隆志（山梨県・環境科学研）

青木が原樹海と野尻草原のエコトーンにおけるマイクロスケールでの群集構造の解析

- 楠本開太郎、井上貴文（九大院・生資）、榎木勉（九大・演習林）

林分構造がツル植物の分布に与える影響—地形及びよじ登り様式による違い—

優秀賞

- 小泉恵佑（明治大・農）、倉本宣（明治大・農）  
下部谷壁斜面における木障刈り後の植物個体群再生様式

- 北川涼、酒井暁子、近藤博史、大野啓一（横浜国立大学・院・環境情報）

浸食作用の卓越する山地集水域における森林構造と地形の対応

- 川上祐佳、権田 豊、崎尾均（新潟大学農学部）  
佐渡島大河内沢における土石流跡地に更新した溪畔林構成種の定着条件

- 井上太樹、籠谷泰行、浜端悦治（滋賀県大・環境）  
暖温帯低地に分布するアカマツとヒメコマツの実生・稚樹定着ハビタットの比較

<景観生態>

最優秀賞

- 山本沙代子（東北大・生命科学）、大野ゆかり（東北大・生命科学）、横山潤（山形大・理）、河田雅圭（東北大・

生命科学)

日本産チョウ 225 種における生息分布の決定要因

優秀賞

- 末吉正尚 (北大院農)、中村太士 (北大院農)  
河川底生動物群集からみた河川景観の構造と機能一撓乱と季節変化に着目して一
- 望月翔太 (新潟大学・院・自然科学)、村上拓彦 (新潟大学・農)  
ニホンザルの生息適地推定—1978 年から 2007 年における 29 年間の変化—

< 遷移更新 >

優秀賞

- 小林真 (北大院農)、廣部宗 (岡山大院環境)、DeLuca TH (Bangor 大)、Bruanin SV、Malashko EV、Valentina FV (ロシア極東農業大)、橋床泰之、小池孝良 (北大院農)  
極東ロシアの山火事跡地において炭が制御する実生の更新
- 國永知裕 (京都府大・院・生命環境)、平山貴美子 (京都府大・院・生命環境)、寄元道徳 (京大・フィールド研)、松田陽介 (三重大・院・生物資源)、奥田賢 (京大・フィールド研)、高原光 (京都府大・院・生命環境)  
冷温帯スギ・落葉広葉樹混交林におけるブナの更新サイト：光環境および外生菌根形成率との関係
- 柴田嶺 (東北大・理)  
里山林を構成する樹種における萌芽特性の比較

< 植物繁殖 >

最優秀賞

- 満行知花 (九大・理・生物)、矢原徹一 (九大・理・生物)、芝池博幸 (農環研・生物多様性)、保谷彰彦 (東大・院) 広域システム)  
無融合生殖を行う雑種性タンポポにおける遺伝的多様性が増大する仕組み

優秀賞

- 大松ちひろ、大原雅 (北大・院・環境科学院)  
サトイモ科植物マムシグサの性転換の動態と繁殖との関係
- 市橋隆自 (九大・農・演習林)、館野正樹 (東大・理・日光植物園)  
野外つる植物個体の成長特性 ~ つる植物は成長が早い？
- 中村元香 (千葉大・理)、中村隆俊 (東農大・生物産業)、土谷岳令 (千葉大・理)  
水生植物の窒素獲得様式と根の呼吸特性

< 植物生理生態 >

最優秀賞

- 杉浦大輔、館野正樹 (東大・院・理・日光植物園)  
植物の弱光環境下における最適物質分配 なぜ根の割合を少なくするのか？
- 伊藤理恵、増沢武弘 (静岡大学大学院理学研究科)  
富士山森林限界付近におけるタデ科植物の環境適応

優秀賞

- Bontempo e Silva, E.A., Hara, T., Sumida, A., Ono, K. (Hokkaido Univ.).  
An ecophysiological field study of *Abies sachalinensis* and *Picea glehnii* seedlings in Hokkaido.
- 宮下彩奈、館野正樹 (東大・理)  
いろいろな「耐陰性」
- 井上裕太 (愛媛大・連合農学)、田中憲蔵 (森林総研)、市栄智明 (高知大・農)  
マレーシア熱帯雨林の林冠部における異圧葉・等圧葉樹種の水利用特性
- 石塚航、後藤晋、梶幹男 (東大・演習林)  
更新初期段階におけるブナ属 2 種の春期未展葉型死亡に関する成長形質

< 植物個体群 >

優秀賞

- 恩田義彦、田中健太 (筑波大・菅平セ)  
標高が変わると死ぬ季節は変わるか？一標高分布の広いミヤマハタザオの場合一
- 草嶋乃美、加藤優希、大原雅 (北大・院・環境科学)  
クローナル植物バイケイソウ個体群の遺伝的構造
- 浦田悦子 (横国大・院・環境情報)、藤原一繪 (横国大・院・環境情報)  
林冠ギャップと土壌環境はマングローブ稚樹の成長と生存率に影響を与えるか？一オヒルギとヤエヤマヒルギを対象として一
- 加藤健吾 (総研大・極域科学)、伊村智、神田啓史 (極地研)  
南極の湖沼底に生育する蘚類の分類の再検討および遺伝的多様性について

< 逆粉種子散布 >

最優秀賞

- 坂本亮太、川窪伸光 (岐阜大学大学院 応用生物)  
開花時期で異なる結実率が明らかにするアゲハチョウ送粉効果

< 動植物相互関係 >

最優秀賞

- 藤田真梨子、前藤薫 (神戸大・農)、松井淳 (奈教大・生物)、寺川眞理 (京大・理)、駒井古実 (大芸大・環)、湯本貴和 (地球研)  
種子-葉利用型植食昆虫の豊凶による季節消長の変化
- 高木俊、宮下直 (東大・農・生物多様性)  
異なる時間スケールにおけるシカ採食圧が植食性昆虫への間接効果のプロセスに与える影響
- 加藤俊英 (東大・院・総合文化)、Arturo Bonet (Institute de Ecologia, Mexico)、神保宇嗣、伊藤元己、嶋田正和 (東大・院・総合文化)  
スペシャリスト植食性昆虫の多様化は寄主植物の影響を受けるのか？
- 小黑芳生、酒井聡樹 (東北大学・院・生命)

どんなお花が食べられる？—キク科植物の繁殖器官の被食に影響する要因

- 鈴木智之、安東義乃、大串隆之（京大生態研）  
アワダチソウゲンバイがセイタカアワダチソウのリターの初期分解に及ぼす影響
- 米谷衣代（ベルリン自由大）、上船雅義、高林純示（京大・生態研）  
コナガ幼虫食害植物に対する寄生蜂の誘引性：生得的反応と学習の効果

#### <行動>

最優秀賞

- 岡野淳一、菊地永祐（東北大・東北ア研）  
可携巣トビケラの巣材選好性の“地質的”変異
  - 伊藤亮、森哲（京大・動物行動）  
種内コミュニケーションに音声を利用しないマダスカルのトカゲ類2種による鳥類警戒声の盗聴
- 優秀賞
- 住友宏幸、廣田忠雄（山形大・院・理工）  
精子置換による配偶者選択への影響
  - 吉村友里、粕谷英一（九大・理・生態）  
くさい蛙の真相〜ツチガエルの分泌物はシマヘビからの捕食回避に効果的〜

- 佐々木那由太・渡辺守（筑波大・院・生命環境）  
雌の多回交尾に対抗したナミアゲハの雄の精子注入戦略
- 小宮竹史（京都大・院理・動物生態）、森阪匡通（京都大・野生動物）  
貝に卵をあずける魚、ヒガイ類における超高速の産卵行動
- 平山寛之、粕谷英一（九大・理・生態）  
卵寄生リスクに応じた産卵場所の決定は子の生存率を高めるか？

#### <進化>

最優秀賞

- 深野祐也、矢原徹一（九大・理）  
外来植物の、天敵に対する抵抗性の小進化的動態
- 優秀賞
- 山本哲史（京大理院）、A.E.Beljaev（IBS Russia）、曾田貞滋（京大理院）  
フユシヤク蛾の種分化と多様化：冬の寒さが種分化を促す
  - 手塚あゆみ（東北大・院・生命科学）、笠木聡、河村正二（東大・院・新領域）、Cock van Oosterhout（University of Hull）、松島野枝、河田雅圭（東北大・院・生命科学）  
グッピー LWS 遺伝子から探る色覚の進化
  - 新田梢（九大・院理・生物）、坂口祐美（九大・院・生物資源環境科学）、三島美佐子（九大・博）、小関良宏（農工大・工・生命工）、安元暁子（京大/チューリッヒ大）、矢原徹一（九大・院理・生物）  
キスゲとハマカンゾウにおける花色の違いの遺伝的背景
  - 河崎祐樹（名古屋大院・生命農）、伊藤浩史（お茶の水大・

アカプロ）、梶村恒（名古屋大院・生命農）

同系交配は個体群レベルで細胞質不和合性の影響を弱める

#### <種多様性>

最優秀賞

- 河野円樹（自然環境研究センター）、河野耕三（綾町企画財政課）、大澤雅彦（日本自然保護協会）  
里地地域間の土地利用履歴の違いが草地の種多様性に及ぼす影響
- 森照貴（北大・環境科学）、齊藤隆（北大・FSC）  
種多様性と攪乱間に見られる単峰形パターンは何によってもたらされるのか？

優秀賞

- 小嶋智巳、彦坂幸毅（東北大・生命）  
植物形質の種内および種間変異からみた林床群集構造
- 馬場友希（農環研）、井原庸（広島県環境保健協会）、吉武啓（農環研）、  
四国におけるヤミサラグモ類の交尾器の多様性と分化プロセスの解明

#### <動物繁殖、社会生態>

優秀賞

- 佐賀達矢、土田浩治（岐阜大院・応用生物・昆虫）  
シダクロスズメバチのCHC組成による巣仲間認識
- 渡辺賢太、西出雄大、岩淵喜久男（東京農工大・農）  
社会性寄生蜂におけるカースト構成の量的遺伝学的解析
- 岡本美里、大河原恭祐（金沢大・自然研）  
雌雄の遺伝的交流を伴わないウメマツアリ *Vollenhovia emeryi* の繁殖様式—女王生産における有性・無性生殖について—
- 日室千尋、横井智之、松浦健二（岡大院・環境・昆虫生態）  
シロアリ卵の揮発性フェロモン Part 1—卵への定位と認識のメカニズム—

#### <個体群>

最優秀賞

- 竹川聡美（北大・環境科学院）、永田純子（森林総合研究所）、増田隆一（北大・理学研究院）、宇野裕之（道環境科学研究センター）、齊藤隆（北大 FSC）  
エゾシカ個体群の分布拡大に伴う最近 15 年間での遺伝的構成の変化
- 優秀賞
- 山道真人（総研大・生命共生体進化学）、吉田丈人（東大・総合文化、JST さきがけ）、佐々木顕（総研大・生命共生体進化学、JST さきがけ）  
侵入タイミングが定着の成否を決める
  - 川西亮太、井上幹生、三宅洋（愛媛大・院・理工）  
表流水が枯渇する河川におけるヒナインドジョウの個体群維持機構：避難場所としての河床間隙域の重要性
  - 寺村皓平（岡山大・院環境）、岡田泰和、高橋一男（岡山大・異分野融合コア）、宮竹貴久（岡山大・院環境）

キイロショウジョウバエにおける発育期間に関する選抜実験とゲノムワイドスクリーニング

- 銭谷純平（北大・環境科学院）、齊藤隆（北大FSC）、石橋靖幸（森林総研・北海道）、Anna Pauline de Guia（フイリピン大学）、河合久仁子（北大FSC）、大西尚樹（森林総研・東北）  
局所スケールと地域スケールにおけるエゾヤチネズミ *Myodes rufocanus* 個体群の空間的遺伝構造の違い
- 京極大助、西田隆義（京大・農・昆虫生態）  
セックス アンド ザ シャーレ：マメゾウムシの種間競争と繁殖干渉
- 岸本康誉（兵庫県森林動物研究セ）、藤木大介、坂田宏志（兵庫県立大）  
シカ密度と農業被害程度の関係の経年変化とその要因

#### <動物群集>

##### 優秀賞

- 石井恵一郎、牧野渡、占部城太郎（東北大・生命）  
アリー効果とケンミジンコの定着成功率：実験による解析
- 八杉公基、堀道雄（京大院・理）  
アンコウとその被食者の間に見られる左右性の影響
- 曾我昌史、小池伸介（東京農工大）  
都市近郊林の蝶類に林分レベルの要因が及ぼす影響
- 栗野将、槻木（加）玲美、牧野渡、石田聖二、松島野枝、河田雅圭（東北大・生命）、小田寛貴（名大・年代測定センター）、占部城太郎（東北大・生命）  
プランクトン遺骸で復元する溜め池の近過去生物群集：山形県畑谷大沼の例
- 原口岳（京大・生態研）、内田昌男、柴田康行（国環研）、陀安一郎（京大・生態研）  
異地性腐食連鎖と自生性生食連鎖が形成する樹上食物網  $\Delta^{14}\text{C}$  によるクモの機能群間の利用エサ資源比較

#### <保全>

##### 最優秀賞

- WANG Zhe（東大・院・農・保全生態）  
保全上重要性の高い湖岸湿原における Facilitator としてのカモノハシ
- ##### 優秀賞
- 横川昌史（京大院・農）、安部哲人（森林総研九州）、井鷲裕司（京大院・農）  
絶滅危惧植物ハナシノブ個体群の生態特性が繁殖成功と遺伝的多様性に与える影響
  - 佐々木太毅（明大・農・応用植物生態）、清水真理子（東邦大・理・生物）、北村亘（東大・農・生物多様性）、増田直也（NPO 法人リトルターン・プロジェクト）、瀧本岳（東邦大・理・生物）、倉本宣（明大・農・応用植物生態）  
絶滅危惧種コアシサシの効率的な保全への提案：白い地面による誘引の効果
  - 柚原剛（東邦大院・理）、多留聖典（東邦大・東京湾生態系研究セ）、風呂田利夫（東邦大院・理）  
東京湾における水路内の小さな干潟に生息する希少ベ

#### ントス

- 河村詞朗（岩大院・農）、東淳樹（岩大・農）、糸川拓真、金子絵里、河端有里子（岩大院・農）、大島和峰（元岩大院・農）、津田健伍（元岩大・農）  
サシバの生息地における止まり木の重要性
- 味岡ゆい、愛知真木子、上野薫、寺井久慈、南基泰（中部大院・応生）、小田原卓郎、横田樹広、那須守、米村惣太郎（清水建設（株）・技術研）  
土岐川・庄内川流域圏における里地里山指標種ハルリンドウのハビタット広域評価
- 福田栄二（広島大・総合科学）、佐々木晶子、中坪孝之（広島大・院・生物園）  
暖温帯のオオミズゴケはどのように光合成生産を行っているのか？
- 土金慧子、宮下直（東大・農）  
ニホンカナヘビの生息地としての棚田景観の評価
- 水谷未耶（京大・農）、兼子伸吾、井鷲裕司（京大院・農）  
日本に生育する絶滅危惧種トキワマンサクの全野生個体解析による多様性評価
- 芦澤和也（明治大・院・農）、木村恵、練春蘭（東大・ア生セ）、倉本宣（明治大・農）  
マイクロサテライトマーカーを用いた落葉低木ユキヤナギの遺伝的構造
- 関香菜子（兵庫県立大学大学院）、横山真弓、森光由樹、室山泰之（兵庫県立大学 / 兵庫県森林動物研究センター）、斎田栄里奈（兵庫県森林動物研究センター）  
忌避条件付けの有無によって、ツキノワグマの人為的環境利用に違いがあるか？
- 今井淳一（東大・農）、角谷拓（国環研）、水谷瑞希、平山亜希子、松村俊幸（福井県）、鷲谷いづみ（東大・農）  
里地里山における土地利用のモザイク性と生物分布との関係：福井県の市民参加型調査データを用いた検証

#### <動物生活史>

##### 優秀賞

- 棚橋薫彦、松下範久、久保田耕平、富樫一巳（東大院農）  
クワガタムシは材食性？それとも菌食性？
- 阿部真和、山平寿智（新潟大・院・自然科学）  
メダカの成長速度の緯度間変異における種内および種間パターンについて
- 大久保慶信（宮崎大学・院・農工）、高橋俊浩、森田哲夫（宮崎大学・農）  
環境温度と同居個体の存在がヒメネズミの日内休眠に及ぼす影響
- 福西悠一、益田玲爾、山下洋（京大・フィールド研）  
初期生活史の異なるクサフグとトラフグにおける紫外線耐性の個体発生と種差

#### <生態系管理>

##### 最優秀賞

- 千谷久子（東大院・新領域）、西川潮（新潟大・超域）、高村典子（国環研・リスク）、山室真澄（東大院・新領域）  
水棲カメ類は侵入種アメリカザリガニの管理に有効か？

- 松林順、森本淳子（北大院農）、間野勉（道環境研）、南川雅男（北大地環研）、中村太士（北大院農）  
安定同位体を用いたヒグマの食性分析

優秀賞

- 宮野晃寿（筑波大・生物資源）、藤岡正博、遠藤好和、佐藤美穂（筑波大・農林技術センター）  
調整池に繁茂する外来スイレンのソウギョによる抑制
- 戸田春那（農工大・院）、梶光一（農工大）、丸山哲也（栃木県）、谷澤（栃木県猟友会）  
栃木県におけるシカの分布と狩猟者の意識・行動・努力量から見た個体数管理対策の検討
- 難波海南子（北大・苫小牧研究林）、揚妻直樹（北大・和歌山研究林）  
人工林における風倒木伐採施業の有無が哺乳類の生息地利用に与える影響

<外来種>

優秀賞

- 南木大祐、久保田康裕  
外来生物マングースは希少鳥類の分布に影響を与えているか？
- 辻本恵（総研大・極域）、伊村智、神田啓史（極地研）  
南極観測事業における外来生物持ち込みの特徴とその危険性
- 佐藤允昭（東京大・農）  
水草タイプによるアメリカザリガニからヤゴへの捕食圧軽減効果
- 岩下明生、小林大輔、安藤元一、小川博、天野卓（東農大院・農・野生動物）  
鎌倉市の都市緑地におけるアライグマと他中型食肉目との競合
- 鉄谷龍之、笠貫ゆりあ、安藤元一（東農大）、石井信夫（東京女子大）、小川博、天野卓（東農大）  
外来種ハリネズミの捕獲効率

<物質生産・物質循環>

最優秀賞

- 友常満利、吉竹晋平、関根有哉（早稲田大・院・先進理工）、小泉博（早稲田大・教育）  
ミクロMRIによる森林土壌構造の観察
- 優秀賞
- 藤井一至（京大院・地球環境）、早川智恵（京大院・農）、Patrick van Hees（Orebro大）、舟川晋也（京大院・地球環境）、小崎隆（首都大院・都市環境）  
日本の森林土壌の炭素循環における溶存有機炭素の役割
  - 青木麻耶（京大・農）、藤井一至（京大院・地球環境）、北山兼弘（京大・農）  
熱帯降雨林における根からの有機酸放出量の規定要因
  - 前田由香（九大生資）、菱拓雄、田代直明、久米篤（九大北演）  
北方落葉樹林における斜面方位と樹木の窒素利用の関係
  - 近藤順治、廣部宗（岡大院・環境）、Enkhbaatar

- Altangerel（モンゴル・地理生態研）、Amartuvshin Narantsetseg（モンゴル・植物研）、藤田昇（京大・生態研）、坂本圭児、吉川賢（岡大院・環境）

乾燥程度の異なるモンゴル草原生態系において放牧による被食が土壌化学性の空間的不均質性に与える影響

- 根田遼太、太田誠一（京大・農）、石塚成宏（森林総研）、Joko Heriyanto（PT. MHP）、Agus Wicaksono（PT. MHP）

*Acacia mangium* 植林地土壌における亜酸化窒素フラックス空間構造の季節変動要因

### Ⅲ. 書評依頼図書（2010年2月～2010年7月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 小川利紘・及川武久・陽捷行編「地球変動研究の最前線を訪ねる～人間と大気・生物・水・土壌の環境～」(2010) 440pp. 清水弘文堂書房 ISBN:978-4-87950-595-8
2. 川井唯史・高畑雅一編著「ザリガニの生物学」(2010) 556pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8194-2
3. 川上洋一著「絶滅危惧の生き物観察ガイド東日本編」(2009) 160pp. 東京堂出版 ISBN:978-4-490-20676-0
4. 川上洋一著「絶滅危惧の生き物観察ガイド西日本編」(2010) 160pp. 東京堂出版 ISBN:978-4-490-20677-7
5. 江口英輔・蟻川謙太郎編「色々な感覚の世界 超感覚の仕組みを探る」(2010) 144pp. 学会出版センター ISBN:978-4-7622-3061-5
6. 野島利彰著「狩猟の文化 ドイツ語圏を中心として」(2010) 412pp. 春風社 ISBN:978-4-86110-210-3
7. 和田英太郎・神松幸弘編「安定同位体というメカネ人と環境のつながりを診る」(2010) 174pp. 昭和堂 ISBN:978-4-8122-1017-8
8. 池田和信編「日本列島の野生生物と人」(2010) 332pp. 世界思想社 ISBN:978-4-7907-1471-2
9. 鷺谷いづみ著「にっぽん自然再生紀行」(2010) 118pp. 岩波書店 ISBN:978-4-00-029569-7
10. 鷺谷いづみ・宮下直・西廣淳・角谷拓編「保全生態学の技法 調査・研究・実践マニュアル」(2010) 330pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062219-6
11. 佐藤洋一郎・加藤鎌司編著「ムギの自然史一人と自然が育んだムギ農耕」(2010) 416pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8190-4
12. 八田洋章・大村三男編「果物学」(2010) 392pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01877-3
13. 樋口広芳・黒沢玲子編著「カラスの自然史」(2010) 280pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8196-6
14. 石田敦著「日本の動物園」(2010) 254pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060191-7

#### IV. 寄贈図書

1. 「生物多様性国家戦略」(2010) 360pp. 環境省
2. 「多摩川 第126号」(2010) 16pp. (財)とうきゅう環境浄化財団
3. 「食と緑の科学 64」(2010) 122pp. 千葉大学大学院園芸学研究科
4. 「うみうし通信 No.67」(2010) 12pp. (財)水産無脊椎動物研究所

#### V. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

1. 2010年度コスモスセミナー自然観察教室「集まれ昆虫好きな子供たち2010」  
期日：2010年8月2日－4日  
会場：関西学園都市・清滝・室池地区「アイ・アイ・ランド」
2. 国際シンポジウム「野生動物管理の担い手：狩猟者と専門的捕獲技術者の育成」  
日時：平成22年7月17日  
場所：東京農工大学農学部本館講堂
3. Techno-Ocean2010  
日時：2010年10月14日－16日  
場所：神戸国際展示場
4. 第2回国際北極研究シンポジウム  
日時：平成22年12月7日－9日  
場所：学術総合センター 一橋記念講堂

### お知らせ

#### 1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

##### (1) 鹿島学術振興財団2010年度研究助成

- ①我が国学術の発展並びに学術の国際交流を図るため、都市・居住環境の整備および国土・資源の有効利用および文化的遺産・自然環境の保全等による国民生活の向上に寄与する研究に対して助成を行なう。
- ②総額4,300万円(1件あたり300万円以内)
- ③2010年11月20日(土)
- ④日本生態学会(学会推薦が必要です)

##### 2. 国際カゲロウ・カワゲラ学会合同大会開催案内

2011年6月、国際カゲロウ・カワゲラ学会(正式名称：第13回国際カゲロウ会議・第17回国際カワゲラシンポジウム合同大会)を山梨県清里にて開催いたします。みなさま奮ってご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

〔概要〕

会場：山梨県北杜市高根町清里、清泉寮  
日程：2011年6月5日－11日

会費：早期登録：一般50,000円、学生35,000円

早期登録開始：9月1日

ホームページ：

<http://cse.ffpri.affrc.go.jp/yoshi887/jointconference2011.html>

問い合わせ(事務局)：

〒612-0855 京都市伏見区桃山町永井久太郎68

森林総合研究所 関西支所内

国際カゲロウ・カワゲラ学会合同大会事務局

吉村真由美(m.yoshimura@affrc.go.jp)

主催：国際カゲロウ・カワゲラ学会実行委員会

後援：日本昆虫学会、応用生態工学会、日本生態学会、日本陸水学会

### 書評

大串隆之・近藤倫生・野田隆史編(2009)「群集生態学5メタ群集と空間スケール」京都大学出版会 pp.194  
ISBN:978-4-87698-347-6

本著では、大学(大学院)で生物群集を専攻する研究者らが、21世紀初頭に登場したメタ群集の考え方を、実際にフィールドから得られたデータをもとに解析した「実証研究」や従来の考え方を整理して尤もらしい理論を構築した「理論研究」を通じて様々な空間スケールでみられる生物群集のパターンとその維持形成の機構を紹介している。扱われている研究例は異なる対象を扱ったものではあるが、根幹にある部分は共通しており、「空間スケールに依存して群集のパターンとその維持形成の機構が変化するのは、①生息場所の空間構造、②環境の異質性、③これらの時間的な変動性、④生物の移動能力、⑤生物種の特異性間の関係、が互いに関連しあって生じている」というものである。

本著は、第1章「熱帯林樹木の種多様性」、第2章「食物連鎖はなぜ短いか?」、第3章「群集集合の偶然性と空間スケール」、第4章「局所群集からメタ群集を組み立てる」、第5章「メタ群集の共存メカニズム」、終章「課題と展望」からなる。

第1章では、種多様性の決定要因が、異なる空間スケールとどのようにかかわっているのかを、熱帯林で行われた大規模研究の成果をもとに紹介している。第2章では、種数-面積関係や個体群密度の空間動態を考慮した新しい仮説「生態系サイズ仮説」に言及し、この仮説を支持する証拠を紹介している。第3章では、群集集合が生じる空間スケールに関する要因として「攪乱パッチの大きさ」、「攪乱パッチの種供給源からの距離」、「環境異質性の空間的広がり」の三つが挙げられるという仮説を紹介している。第4章では、ベントスのメタ群集レベルでの実証研究の例を紹介している。第5章では、理論研究における仮定と実際の群集とのギャップを示し、実際の群集における共存機構を理論的枠組に沿って統合的に理解する方法が紹介されている。終章では、群集生態学における空間スケールの重要性やメタ群集の考え方の利点を再提起させ、今後の課題として「理論研究と実証研

究の歩みより」、「時間軸の導入」、「実証研究の偏りの改善」の3点を紹介している。

90年代には、まだ「メタ〜」という言葉は聞いたことが無かったし、あまり世間一般には広がっていなかったように思う。しかし、最近は「メタ〜」による生態学の説明が非常に多く見られるようになってきた。従来の個体群・群集・生態系という捉え方に、「メタ」という接頭語を付記してそれぞれの生態学的対象をよりの確に理解しようとする試みがなされている。そういう意味で、「メタ〜」は最新の生態学の一つである、と最近気づいて本書を参照した。

例えばメタ個体群の概念に基づいて、局所個体群の変動を考察している研究発表は散見されるのだけれど、研究では分からなかった部分（ブラックボックス）をメタ個体群という用語を使って曖昧にしている気がして、僕は「メタ〜」による生態的現象の説明は漠然としていて納得がいかなかった。本書を読んで、その奥歯にものが挟まったような感覚の原因が分かった。メタ個体群やメタ群集では違うのかもしれないが、この分野は理論やモデルが先行しすぎていて、実証的な部分が非常に弱いのである。著者らも指摘しているが、優れた実証研究がなされることで、この理論が汎用性の高いものになっていくかもしれない。今後、この理論がどのように発展改良されていくのか、興味深いと感じた。

本書は、上記のような最近のメタ群集と空間構造に関する知見を知り、今後どのような改善点があるのかを把握するための、非常に初歩的かつ導入的な図書であると感じた。また、対象を変えて、メタ個体群やメタ生態系を学ぶ上でも参考になる点（理論研究のみではなく実証研究も充実させていこう！といったことなど）があり、従来の個体群・生物群集・生態系という枠組みを超えた（＝メタ）、最新の生態学の学習にも参考になると感じた。（黒河内寛之）

馬場多久男著（2009）「花実で分かる樹木」信濃毎日新聞社 pp.416 ISBN:978-4-7840-7093-0

著者の馬場多久男氏は、昭和12年長野県伊那市生まれで、信州大学農学部教育特任教授である。著書には、『冬芽でわかる落葉樹（亀山章 監修、馬場多久男 解説・写真）』や『葉でわかる樹木（馬場多久男 著）』などがある。本書『花実でわかる樹木（馬場多久男 著）』は、これらの著書の姉妹編として、在来種・外来種・園芸品種などを含む計951種の樹木について花や果実を交えて紹介および解説をした樹木図鑑である。

本書は、「はじめに」・「この本の使い方」・「検索編」・「解説編」・「索引」から構成されている。「この本の使い方」では、本書における樹木検索の方法や、樹木の形・葉のつき方・花の形・果実の形などの本書を読み進める上で必要な樹木の基本となる形態的特徴が説明されている。「検索編」では、IからIXまでの樹木の検索表と各検索表に属する樹木の写真が果実や花を中心に掲載されている。「解説編」では、1ページにつき1〜2種の樹

木について紹介されている。

本書は「解説編」に315ページ（全407ページ中）が割かれており、樹木の解説に力が入れている。各樹木は花や果実を含んだ2〜9枚ほどの写真と解説文から紹介されており、写真には雄雌の花の違いや樹高・胸高直径などが付されている。雌雄の違いとは、例えばツガ（*Tsuga sieboldii*）のように雌雄同株だが花は単性のもの場合は雄・雌それぞれの花が紹介されている。もちろん、イチョウ（*Ginkgo biloba* L.）のように雌雄異株の場合も雄・雌それぞれの花が紹介されている。解説は250文字程度で、属名・種名・学名・樹形・樹皮・花・球果・葉・分布が中心に構成されている。なお、別名・園芸品種・類似種がある場合はそれらにも簡単に触られている。

本書『花実でわかる樹木（馬場多久男 著）』は現場で実際に使用してその威力を発揮することが期待される。樹木の検索や分類に関しては、今まで非常に多くの優れた図書・図鑑が出版されており枚挙にいとまがないが、詳しい書籍ほど重くて大きくなる傾向にあり現場での利用がしにくくなる。そのため、軽くて手頃なサイズで利用できる書籍があると大変便利である。

ということで、僕も実際に本書『花実でわかる樹木（馬場多久男 著）』を持って花の咲いている樹木を探しに野外に出てみた。

—検索表編に関して—

総検索表から大まかな検索を開始し、各検索表（I〜IX）にて樹種を特定し、更に各検索表に対応した樹木の写真と照合するという流れになっている。総検索表には4段階の分類があるのだが、文章と簡略化した絵が添えられており概してわかりやすかった。例えば、分類の第1段階『「高木・小高木・低木」or「つる・ややつる性木本」』では、ややつる性という表現が曖昧さを内包しているが、例示されている絵と見比べるとイメージが持てた。第2段階〜第4段階は「葉」（と一部「花」）に着目した分類だが、葉が確認できる高さにあり（あるいは落ち葉として存在していて）分かりさえすれば、総検索表を比較的容易に進めることができ各検索表へと進むことができた。各検索表では「葉のより細かい違い」と「花あるいは果実の特徴」とをもとに樹種を特定していく。この段階になると、表現の一部がより抽象的となり（例、花の形が「球形・卵形」or「楕円形・円筒形」）、いくつかの写真が例示されているとはいえ分類しきるのは大変になった。そのため、樹木写真との照合をする際は、その前後の樹種と比較をしつつ候補を絞っていった。各検索表に対応した樹木写真であるが、代表的な写真が採用されており見やすかった。ただ、写真のスケールが統一されていないため（スケールバーが記載されていないため）、大きさがわかりにくいという難点があった。

—解説編に関して—

検索表編で調べた結果をもとに解説編に飛んで、観察していた樹種について簡単な知識を得ることができた。250文字程度の文章であるため、野外において簡単に目を通すことができる点は非常に使いやすかった。また、

検索表編で絞りきれなかった樹種に関して、解説編に掲載されている写真や解説文を参照することで、花や果実以外の特徴から樹種を同定することができた。ただ、検索表編同様、写真にスケールが無い点が判断をつけにくくしていると感じられた。解説編では検索表の樹木写真にはない花木も紹介されているのだが、その中に園芸品種もある。たくさんの園芸品種があり、それぞれの名が紹介されているのだが写真だけから違いを見分けるのは大変であった。

本書には、非常に多くの樹木が明瞭な写真と共に掲載されていて野外だけでなく屋内でも十分に図鑑として見応えがある構成になっている。葉があれば野外で採取した花や果実の同定をすることもある程度可能であり、逆にこの木からはどんな花や果実が作られるのかを写真と共に知ることも可能である（僕の場合、後者の方がより利用価値が高いと思われた）。

(黒河内寛之)

綿貫豊著 (2010) 「海鳥の行動と生態—その海洋生活への適応—」 生物研究社 ISBN:978-4-915342-56-1

日本は四方を海に囲まれた国であり、海岸線の長さは中国の2倍、アメリカの1.5倍ある。島の総数も6,800あり、典型的な海の国と言える。当然、海鳥も多数おり、亜寒帯種から亜熱帯種まで35種ほどが繁殖する。しかし、日本ではこれまで、海鳥の生態や行動の科学を総合的に扱った書籍はないに等しかった。

本書は、海鳥の進化から形態、生態、行動までを幅広く扱った良書である。単にいろいろなことを述べているからよいというのではなく、海鳥という鳥たちが海洋環境をいかにうまく利用して生活しているか、という点にきちんと焦点をあて、全体を構成している点がすぐれている。海鳥は空中と水中という二つの異なる環境にともに適応した唯一の生物であり、そこに進化、適応上の特異で興味深いところがある。その点をしっかりと押さえ、形態、生態、行動までを幅広く扱っているのである。

全体は、I 進化と生態、II 運動機能と生理、III 海上分布と採食行動、IV 繁殖と適応戦略、V 海洋環境変化と海鳥、の5部で構成されている。I 進化と生態では、海鳥の由来や進化の概要が述べられたのち、生活の糧となる食物とその採食法について明らかにされる。陸の鳥類が美しい飾り羽や複雑なさえずり、くちばしの形状などを多様化させているのに対して、海鳥では翼の形状や体の大きさなど、飛行や潜水にかかわる運動機能に多様性が現れている。これは種によって、すみ場所や運動能力の異なる水面下の餌動物を追跡、捕獲することと関係していることが明らかにされる。

II 運動機能と生理では、空中と水中をすばやく移動することのできる海鳥の運動機能に焦点があてられる。肺呼吸をする海鳥は、酸素が補給できない水中を移動する。一方、水中での移動は、水という密度の高い媒体の中での運動である。水の密度は空気の800倍。こうした条件の中で海鳥は、生理的特性をふくめてすぐれた運動機能

を発揮する。その実態と仕組みが明らかにされている。この関連の研究には、データロガーなどの高度情報通信技術の利用が欠かせない。技術の発展が、いかに通常ではなしえない困難な課題を解決してきたかが、生き生きと語られている。

III 海上分布と採食行動では、広大な海洋環境の中にあつて海鳥がどのようにして餌となる魚などを見つけ、採食するかについて述べられる。一見一様に見える海洋環境にも、潮汐や太陽の日周期・年周期などの時間スケールの異質性と、海岸線や海底地形などの地形によってもたらされる空間スケールの異質性が見出される。それらの異質性は、植物プランクトンや動物プランクトンの分布、ひいては海鳥の餌動物となる魚などの分布にも影響する。海鳥はこうした餌動物の時間的、空間的分布の異質性を、記憶や海洋学的特徴を利用して知り、採食していることが示される。

IV 繁殖と適応戦略では、海洋を生活の場にしながらも繁殖は陸上で行なわざるを得ない海鳥が、どのようにして繁殖をやり遂げているかが論じられる。長寿命、少ない一腹卵数、長い育雛期間、ゆっくりとした雛の成長などの生活史特性が互いにどのようにかわりあい、固定した陸上の繁殖地と、遠く離れた採食地の行き来の中でどう機能しているのかが明らかにされる。ここでも、衛星用送信機やデータロガーなどの高度情報通信技術の利用が有効であることが示される。

最後のV 海洋環境変化と海鳥では、長期的な気候変化や近年の人間活動が海鳥の生活や個体数に及ぼす影響が扱われる。10年スケールで観察されるような長期的で劇的な気候変化は、海鳥の餌となる魚やイカなどの資源量を大きく変動させ、海鳥の繁殖成績や個体数に多大な影響を及ぼす。ウトウの繁殖時期が春の気温に影響される一方、重要な餌となるカタクチイワシの入手可能時期は対馬暖流の勢力によって決まるため、その両者にずれが生じ、ウトウの繁殖成績を低下させることがある。近年の人間活動は、肉や羽毛などの利用、漁業による混獲、繁殖地への天敵や競争者の導入、油流出などの海洋汚染などを通じて、海鳥の生活をおびやかす、個体数を減少させている。そうしたさまざまな影響の実態がいていねいに述べられている。

内容の概要は以上であるが、扱われていることがらは、最新の進化生物学や行動生態学の考えや手法を十分にとりいれたもので、全体としてたいへん読みごたえがある。著者自身の手になるイラスト入りの図や、関連の話題を取り上げたコラムは、時として難解な内容に対する読者の理解を助けている。

内容の多くは、著者とその共同研究者による数多くの研究の成果にもとづいている。ここ10年、20年の海鳥研究は飛躍的に進み、進化や適応などの研究分野の発展に重要な貢献を果たしてきた。その中で日本の海鳥研究は、フランスやイギリスなどと並んで世界の海鳥研究をリードしてきた。著者の綿貫豊氏は、その流れの中で常に中心的な役割を果たしてきた。その業績をたたえ、2009年には綿貫氏に、日本生態学会大島賞が授けられている。本書は、これまでの一連の研究の到達点を

示すものであり、その内容を、これから関連分野の研究を目指す若い人たちにわかりやすく伝えるものとなっている。生態学、進化生物学、動物行動学、鳥類学、保全生物学などに関心のある人に広く読まれることが望まれる。

(東京大学大学院農学生命科学研究科 樋口広芳)

**大崎直太著 (2009)「擬態の進化—ダーウィンも誤解した150年の謎を解く」海游舎 286pp. 本体価格 3,000円 ISBN:978-4-905930-25-9**

フィールド観察の鉄人、大崎直太による意地と気合いを込めた快著。著者は、大学院生のころから一貫して、昆虫と植物の相互作用による進化に関心をもって研究を進めてきた。著者にとって擬態の研究はいわば副産物のようなものだそうだが、それにしても思い入れのこもった著書である。1982年に1ヶ月ほどボルネオに滞在し、別の目的で採集したチョウの標本を13年後に掘り起こし、ピークマーク（鳥に襲われたことを示す翅の傷）の頻度を解析してみたことがそのきっかけとなったとある。

イギリスの博物学者ベイツは、アマゾンを探検し、ヘリコニウス科とシロチョウ科のチョウの翅の模様が地域によって大きく変化し、しかも、それぞれの地域の中では見分けがつかないほどよく似ていることを発見した。ベイツは、シロチョウ科のチョウが、同じ地域にすむ味の悪いヘリコニウスに擬態することで生存率が高くなった、と考えた。そして、ベイツは、味の悪い種と良い種の、色彩や模様の収斂現象（これをベイツ型擬態という）はダーウィンの唱えた進化論の決定的な証拠であると主張したのである。ベイツ型擬態は、ダーウィンの進化論のひとつの証拠として認識されてきたが、そのメカニズムに関しては、進化論の枠組みの中でさまざまな説明が提案されてきた。

ダーウィンの進化論が認められるまでに紆余曲折があったように、ベイツ型擬態もまた、反対意見や批判に晒されながら、しだいに精緻化されてきた。我が国では、ベイツ型擬態とは何かだけはよく知られているが、その提唱後、世界的にどのような議論が起こり、どのような理論的進展があったかについては、ほとんど知られていない。本書は、著者が抱いたベイツ型擬態への疑問と新たな仮説の提案によって、世界的な議論に挑戦した顛末を紹介したものである。

本書の前半は、ベイツ型擬態の進化を説明するさまざまなモデルが生まれてきた背景と、その基本理論の解説に費やされている。序章は全体の要約のようなものだが、1章ではダーウィンの進化論が生まれた時代背景、2章はベイツとウォーレスのブラジルへの旅、3章はベイツ型擬態の性淘汰説による説明、4章はミュラー型擬態とベイツ型擬態の対比、5章は擬態がもつ警告信号としての意味、について述べられている。そして、6章から、ようやく著者の主張が展開される。

6章は、おもに著者がNatureに掲載した論文の解説である。ベイツ型擬態のチョウについて、ピークマークの

頻度が雌雄で異なることに注目し、擬態していないオスよりも擬態しているメスのほうが鳥に襲われやすいことを示している。そして、これが擬態のコストを反映しており、オスはもともと襲われにくいので擬態のコストを支払う必要はないのだ、と主張する。確かにこの主張はうなずける。ところが、この論文はコストの中身についての議論が不足していた。そのため、レフェリーの指示に従って、性淘汰説を支持するような中途半端な記述をしまったことを著者は残念がっている。このようなことを正直に書いている点、著者の性格を表して面白。

7章と8章はコストとは何かについての議論である。性淘汰説が考えるベイツ型擬態のコストは、擬態したメスはオスと同種と認識されない可能性が生じ、交尾と産卵が他のメスより遅れてしまうことである。著者は、そうではなく、擬態したメスは生理的に寿命が短くなるのだと主張する。たとえば、擬態メスは警告色の赤や黄色を発色するには、カロテノイドのような有毒の色素が必要で、そのために寿命が短くなるのかもしれない。著者も書いているように、この点に関しては、まだ検討の余地がある。

この章までの話の展開は、ベイツ型擬態がメスにだけ現れることを前提にしていた。しかし、頻度は高くないが、オスにもベイツ型擬態が現れるのである。そうであれば、性淘汰説は用をなさないことになる。では、著者の主張する「生理的コストを伴う補食回避仮説（評者の仮称）」は両性に生じる擬態を説明できるだろうか。大型のチョウに両性擬態が多いことから、著者は、チョウのサイズに関係があるのではないかと考えているようである。9章と10章では、著者がアフリカに滞在したエピソードとともに、メスの方が、あるいは大型のチョウほど餌としての価値が高いこと、擬態によって捕食者を遠ざらせることの意義を、最適補食戦術のモデルを援用して説明している。

11章は、さらに鳥の補食が起きる時間帯に話が及ぶ。ピークマークは左右対称にできることが多い。ということは、チョウが翅を閉じてとまっているときに襲われやすいことを示唆している。まだ体温の上から早朝がチョウにとって危ない時間帯であり、昼間に補食される可能性はあまりないのだ。しかし、そうであれば、著者のチョウの飛翔力に関する議論は何だったのだろうか、と、少し混乱してしまった。

12章と13章は長めのプロローグともいえる章であるが、近年分布を拡大し話題になっているツマグロヒヨウモンの擬態をどう説明するかという話題も面白いし、類似相関や仮説検証の問題点にも言及している。

全体として面白く読めるが、ダーウィン、ベイツ、ウォーレスなどの巨人の伝記や自分の紀行話、論文掲載までの苦労話が、しばしば、しかも長めに織り込まれているため、論理の流れが切られてしまう印象だった。もちろん、エピソードとしては面白く読ませてもらった。前半の基本理論の解説は、やや食い足りない感もあるが、ページ数のバランスを考えると致し方ないだろう。とは言うものの、ベイツ型擬態のこれまでの議論の展開を知るには、日本語による最も優れた本であり、自信をもつ

て一読をお勧めしたい。

(京大大学生態学研究センター 椿 宜高)

速水格著 (2009)「古生物学」東京大学出版会  
ISBN:978-4-13-062716-0

本書はタイトルの通り、化石を主な研究対象とする古生物学の教科書である。一般向けの軽い本ではなく、内容はあくまで本格的であるが、古生物学の基礎の基礎から丁寧かつ簡潔に解説されており、生態学者にとっては、古生物学とはどのようなものか、を概観する目的に適した書である。

第1章「自然史科学と古生物学」で著者は古生物学を自然史科学(生態学も自然史科学の一分野である)の中に位置づけ、古生物学の一般的な特徴、基本的な研究の進め方などを説明している。第2章「古生物学の歩み」では主に18世紀末以降古生物学の歴史(学説や研究手法の誕生の過程、進化論との関係など)が紹介されている。第3章「化石の意義」では生物が死んでからその遺骸が化石になるまでにどれだけ多くの情報が失われるかが丁寧に解説されている。第4章では「記載と分類」の方法について、第5章「変異と成長」では形態解析の基礎的な方法について解説されている。第6章「機能形態と生活様式」では機能形態学をはじめとして形態の持つ意味を研究する分野について解説されており、第7章「系統と進化」では化石記録からどのように系統を推定し、進化の過程を再現するかについて解説されている。8章では長期間にわたって蓄積された化石記録のデータベースを利用し、多様性の変遷などのマクロな傾向を解析する「情報古生物学」が紹介されている。9章ではタイトルの通り「生きている化石」について説明され、10章「古生物地理」は生物地理学の概説と、カンブリア紀から現在に至る生物地理区の変遷が簡潔に紹介されている。

本書は古生物学について予備知識がない人でも十分に内容を理解できるように配慮されている。全体的に基礎から丁寧に説明されているし、重要な事項に関しては「Box」で解説されている。一部の時代名や生物名などに例外はあるが、本文中でも主要な用語は簡単な解説つきで用いられている。文献情報も充実しているので、さらに深く内容を知りたい人にも有用である。事例研究や経験談がいくつか紹介されており、実際にどのように研究が行われたのかを知ることができる。また、学問の歴史についての記述が充実しており、古生物学全体の歴史(2章)はもちろんのこと、それぞれの分野の歴史や、様々な学説について、それらが提示された背景やその後の評価についても簡潔に紹介されている。特に進化論との関係については2章とあわせて7章3節の「古生物研究者の進化学説」、8章3節の「進化の趨勢」も読むと良いだろう。

生態学では多様性が重要なキーワードの一つとなっているが、多様性の時間変化のデータを利用する人は是非とも3章、4章、8章を読んで欲しい(特に3章)。過去の多様性のデータは化石記録のデータをコンパイルすることによって得られるが、そもそも硬組織を持つ生物し

か化石に残ることはほとんどないし、堆積物に埋もれてからの物理的・化学的作用の影響を受けてさらに情報は失われる(3章)。そのため、化石となって発見されるのは実際に生きていた生物の0.5%以下に過ぎないという見積もりもある(p37)。「白亜紀末の大量絶滅の時期でさえ、1万年あたりで○種絶滅する程度だったが、現在は1年で×種絶滅している」という話を聞くことがたまにあるが、3章を読めばそれがいかに乱暴で危険な比較か実感できると思う。また、8章で紹介された「情報古生物学」ではデータベースを利用することが多いが、同様の性格を持つマクロエコロジーに取り組む人にも参考になるだろう。

注意すべき点は、本書は古生物学の全分野を網羅したものではないということである。本書で紹介されているのは著者が取り組んできた研究分野であり、例えばプレートテクトニクスの成立に重要な役割を果たしたと言われる微化石生層序学など、いくつかの重要な分野については書かれていない。また、紹介された研究は「二枚貝を中心とした軟体動物に偏っている」し、「年月を経たものが多く」(「はじめに」より)、古生物学の最先端についてはあまり書かれていない。そのため、本書に書かれていることが古生物学の全てである、と誤解しないように注意しなければならない。

しかしこれらは決して本書の価値を損ねてはいない。分野を絞ったのは「研究史や近況を知らない分野についてはにわか勉強で体裁を整えるよりは何も書かない方がまし」(「はじめに」より)との著者の判断によるし、また、最先端についての記述が少ないのは、「これだけかわるまい」(「おわりに」より)という、古生物学の基本的な考え方を伝えることを重視したためである。そのため、付け焼き刃の内容で紙面が浪費されることが避けられ、古生物学の本質を基礎から丁寧に解説するという目的は十分に達せられていると思われる。ただ、初学者向けを意識しすぎたためか、内容が少々物足りないと思われる部分があるので、その部分については別の本などで内容を補完する必要があるだろう。

生態学者が直接古生物学的な研究をすることはほとんどなく、必要になったときに使えるデータを使うだけだろう(多様性の変遷を参照したり、分岐年代推定の年代制約に化石記録を使うなど)。本書でその一端が紹介されているように、過去の生物についての情報は、古生物学者たちが化石記録の不完全性という障害と闘いながら明らかにしてきたものである。ただし、不完全な化石記録を完全にすることは不可能であり、過去の生物の情報には危うさが含まれている場合がある。情報を適切に使うためには、それらがどれだけ信頼できるのか、またどれだけの危うさを内包しているのかについての感触くらいは得ておくべきである。そのためにも、過去の生物の情報を某かの形で利用する人には是非本書を手取ることを勧めたい。

(国立環境研究所 生物圏環境研究領域 吉田勝彦)

## 日本生態学会役員一覧

会長	中静 透	2010.1 ~ 2011.12
次期会長	松田 裕之	2012.1 ~ 2013.12
幹事長	粕谷 英一	2009.1 ~ 2010.12
庶務幹事	江口 和洋	2009.1 ~ 2010.12
会計幹事	上野 高敏	2009.1 ~ 2010.12
会計監事	山内 淳	2008.1 ~ 2010.12
	夏原 由博	2009.1 ~ 2011.12

### 全国委員会

全国区	伊藤 哲	2010.1 ~ 2011.12
	占部 城太郎	2010.1 ~ 2011.12
	可知 直毅	2010.1 ~ 2011.12
	河田 雅圭	2010.1 ~ 2011.12
	工藤 岳	2010.1 ~ 2011.12
	甲山 隆司	2010.1 ~ 2011.12
	齊藤 隆	2010.1 ~ 2011.12
	酒井 章子	2010.1 ~ 2011.12
	佐竹 暁子	2010.1 ~ 2011.12
	嶋田 正和	2010.1 ~ 2011.12
	高村 典子	2010.1 ~ 2011.12
	辻 和希	2010.1 ~ 2011.12
	仲岡 雅裕	2010.1 ~ 2011.12
	宮下 直	2010.1 ~ 2011.12
	湯本 貴和	2010.1 ~ 2011.12
地方区	綿貫 豊 (北海)	2010.1 ~ 2011.12
	松木 佐和子 (東北)	2010.1 ~ 2011.12
	吉田 丈人 (関東)	2010.1 ~ 2011.12
	津田 智 (中部)	2010.1 ~ 2011.12
	工藤 洋 (近畿)	2010.1 ~ 2011.12
	鎌田 磨人 (中四)	2010.1 ~ 2011.12
	相場 慎一郎 (九州)	2010.1 ~ 2011.12

### 常任委員会

会長 (中静)		
幹事長 (粕谷)		
常任委員	足立 直樹	2010.1 ~ 2011.12
	池田 浩明	2010.1 ~ 2011.12
	齊藤 隆	2010.1 ~ 2011.12
	原 登志彦	2010.1 ~ 2011.12
	半場 祐子	2010.1 ~ 2011.12
	日浦 勉	2010.1 ~ 2011.12
	中丸 麻由子	2010.1 ~ 2011.12
	湯本 貴和	2010.1 ~ 2011.12

次期会長 (松田)

ER 編集委員長 (河田)

生態学会誌編集委員長 (堀)

保全生態学研究編集委員長 (角野)

将来計画専門委員長 (辻)

自然保護専門委員長 (矢原)

生態教育専門委員長 (嶋田)

大会企画委員長 (大手)

庶務幹事 (江口)

会計幹事 (上野)

### Ecological Research 編集委員会

編集委員長	河田 雅圭	2008.1 ~ 2010.12
編集幹事	中静 透	2008.1 ~ 2010.12
	占部 城太郎	2008.1 ~ 2010.12
	佐竹 暁子	2008.1 ~ 2010.12
編集委員	市岡 孝朗	2008.1 ~ 2010.12
	岩田 智也	2008.1 ~ 2010.12
	江口 和洋	2008.1 ~ 2010.12
	大園 享司	2008.1 ~ 2010.12
	梶 光一	2008.1 ~ 2010.12
	久保田 康裕	2008.1 ~ 2010.12
	工藤 岳	2008.1 ~ 2010.12
	久米 篤	2008.1 ~ 2010.12
	木庭 啓介	2008.1 ~ 2010.12
	酒井 章子	2008.1 ~ 2010.12
	佐藤 一憲	2008.1 ~ 2010.12
	嶋田 卓哉	2008.1 ~ 2010.12
	陶山 佳久	2008.1 ~ 2010.12
	関島 恒夫	2008.1 ~ 2010.12
	高村 典子	2008.1 ~ 2010.12
	瀧本 岳	2008.1 ~ 2010.12
	仲岡 雅裕	2008.1 ~ 2010.12
	長谷川 雅美	2008.1 ~ 2010.12
	原 正利	2008.1 ~ 2010.12
	伴 修平	2008.1 ~ 2010.12
	半場 祐子	2008.1 ~ 2010.12
	彦坂 幸毅	2008.1 ~ 2010.12
	日野 輝明	2008.1 ~ 2010.12
	福井 学	2008.1 ~ 2010.12
	正木 隆	2008.1 ~ 2010.12
	松尾 奈緒子	2008.1 ~ 2010.12
	宮下 直	2008.1 ~ 2010.12
	大塚 俊之	2008.4 ~ 2010.12
	菊沢 喜八郎	2008.4 ~ 2010.12
	清和 研二	2008.4 ~ 2010.12
	Robert Arlinghaus	2008.1 ~ 2010.12
	Michael Boots	2008.1 ~ 2010.12
	Barry W. Brook	2008.1 ~ 2010.12
	Min Cao	2008.1 ~ 2010.12
	Jae Chun Choe	2008.1 ~ 2010.12
	Franck Courchamp	2008.1 ~ 2010.12
	Stuart J Davies	2008.1 ~ 2010.12
	Angus Davison	2008.1 ~ 2010.12
	Tom J. de Jong	2008.1 ~ 2010.12
	Jingyun Fang	2008.1 ~ 2010.12
	Raghavendra Gadagkar	2008.1 ~ 2010.12
	Rhett Harrison	2008.1 ~ 2010.12
	Sun-Kee Hong	2008.1 ~ 2010.12
	John G. Kie	2008.1 ~ 2010.12
	Andrew Liebhold	2008.1 ~ 2010.12
	Mathew Leibold	2008.1 ~ 2010.12

Simon A. Levin	2008.1 ~ 2010.12
Mark D. Scheuerell	2008.1 ~ 2010.12
Janne Sundell	2008.1 ~ 2010.12
Simon Thrush	2008.1 ~ 2010.12
Marinus J.A. Werger	2008.1 ~ 2010.12
Ping Xie	2008.1 ~ 2010.12
Hoi Sen Yong	2008.1 ~ 2010.12
David W. Inouye	2008.1 ~ 2010.12
Erling J. Solberg	2008.1 ~ 2010.12
Kari Klanderud	2008.1 ~ 2010.12
Bas W. Ibelings	2008.1 ~ 2010.12

**日本生態学会誌編集委員会**

編集委員長	堀 良通	2008.1 ~ 2010.12
編集幹事	山村 靖夫	2008.1 ~ 2010.12
	北出 理	2008.1 ~ 2010.12
	森野 浩	2008.1 ~ 2010.12
編集委員	井鷲 裕司	2008.1 ~ 2010.12
	市岡 孝朗	2008.1 ~ 2010.12
	奥田 昇	2008.1 ~ 2010.12
	奥田 敏充	2008.1 ~ 2010.12
	鎌田 直人	2008.1 ~ 2010.12
	木村 和喜夫	2008.1 ~ 2010.12
	古賀 庸憲	2008.1 ~ 2010.12
	小林 剛	2008.1 ~ 2010.12
	近藤 倫生	2008.1 ~ 2010.12
	酒井 聡樹	2008.1 ~ 2010.12
	鈴木 まほろ	2008.1 ~ 2010.12
	辻 和希	2008.1 ~ 2010.12
	津田 みどり	2008.1 ~ 2010.12
	中丸 麻由子	2008.1 ~ 2010.12
	野田 隆史	2008.1 ~ 2010.12
	日浦 勉	2008.1 ~ 2010.12
	彦坂 幸毅	2008.1 ~ 2010.12
	三浦 徹	2008.1 ~ 2010.12
	安井 行雄	2008.1 ~ 2010.12
	大塚 俊之	2008.1 ~ 2010.12
	池田 浩明	2008.3 ~ 2010.12
	沖津 進	2008.3 ~ 2010.12
	田中 健太	2008.4 ~ 2010.12

**保全生態学研究編集委員会**

編集委員長	角野 康郎	2009.4 ~ 2011.12
編集幹事	西廣 淳	2009.4 ~ 2011.12
	三橋 弘宗	2009.4 ~ 2011.12
編集委員	石井 実	2009.4 ~ 2011.12
	石濱 史子	2009.4 ~ 2011.12
	井上 幹生	2009.4 ~ 2011.12
	植田 睦之	2009.4 ~ 2011.12
	梅原 徹	2009.4 ~ 2011.12
	加藤 真	2009.4 ~ 2011.12
	角谷 拓	2009.4 ~ 2011.12
	河口 洋一	2009.4 ~ 2011.12
	倉本 宣	2009.4 ~ 2011.12

小池 裕子	2009.4 ~ 2011.12
小池 文人	2009.4 ~ 2011.12
高槻 成紀	2009.4 ~ 2011.12
館野 正樹	2009.4 ~ 2011.12
中越 信和	2009.4 ~ 2011.12
中丸 麻由子	2009.4 ~ 2011.12
長谷川雅美	2009.4 ~ 2011.12
長谷川真理子	2009.4 ~ 2011.12
早矢仕有子	2009.4 ~ 2011.12
藤井 伸二	2009.4 ~ 2011.12
増田 理子	2009.4 ~ 2011.12
松田 裕之	2009.4 ~ 2011.12
山本 智子	2009.4 ~ 2011.12
湯本 貴和	2009.4 ~ 2011.12
鷺谷 いづみ	2009.4 ~ 2011.12

**自然保護専門委員会**

委員長	矢原 徹一：外国渉外	2010.3 ~ 2012.3
副委員長	加藤 真：近畿、海洋	2010.3 ~ 2012.3
幹事	井田 秀行：中部	2010.3 ~ 2012.3
地区委員	紺野 康夫：北海	2010.3 ~ 2012.3
	佐藤 謙：北海	2010.3 ~ 2012.3
	竹原 明秀：東北	2010.3 ~ 2012.3
	鈴木 孝男：東北	2010.3 ~ 2012.3
	川上 和人：関東	2010.3 ~ 2012.3
	吉田 正人：関東	2010.3 ~ 2012.3
	和田 直也：中部	2010.3 ~ 2012.3
	角野 康郎：近畿	2010.3 ~ 2012.3
	安溪 遊地：中四	2010.3 ~ 2012.3
	大田 直友：中四	2010.3 ~ 2012.3
	鈴木 信彦：九州	2010.3 ~ 2012.3
	逸見 泰久：九州	2010.3 ~ 2012.3
	伊澤 雅子：九州	2010.3 ~ 2012.3
専門別委員	久保田康裕：熱帯・亜熱帯	2010.3 ~ 2012.3
	竹門 康弘：陸水	2010.3 ~ 2012.3
	清水 善和：島嶼	2010.3 ~ 2012.3
	立川 賢一：エコツアーリズム	2010.3 ~ 2012.3
	竹中 千里：大気汚染	2010.3 ~ 2012.3
	増沢 武弘：高山・亜高山	2010.3 ~ 2012.3
	村上 興正：環境行政	2010.3 ~ 2012.3
	横畑 泰志：寄生生物	2010.3 ~ 2012.3
	三浦 慎吾：鳥獣管理	2010.3 ~ 2012.3
	陶山 佳久：遺伝子	2010.3 ~ 2012.3
将来計画専門委員会		
委員長	辻 和希	2010.4 ~ 2012.3
	巖佐 庸	2010.4 ~ 2012.3
	粕谷 英一	2010.4 ~ 2012.3
	湯本 貴和	2010.4 ~ 2012.3
	奥田 昇	2010.4 ~ 2012.3

	五箇 公一	2010.4 ~ 2012.3
	田中 健太	2010.4 ~ 2012.3
	仲岡 雅裕	2010.4 ~ 2012.3
	中丸 麻由子	2010.4 ~ 2012.3
	佐竹 暁子	2010.4 ~ 2012.3
	松木 佐和子	2010.4 ~ 2012.3
常任オブザーバー		
	松本 忠夫	2010.4 ~ 2012.3

#### 生態学教育専門委員会

委員長	嶋田 正和	2010.4 ~ 2012.3
	山村 靖夫	2010.4 ~ 2012.3
	西脇 亜也	2010.4 ~ 2012.3
	広瀬 祐司	2010.4 ~ 2012.3
	久保田康裕	2010.4 ~ 2012.3
	中村 雅彦	2010.4 ~ 2012.3
	山路 恵子	2010.4 ~ 2012.3
	中井 咲織	2010.4 ~ 2012.3
	浅見 崇比呂	2010.4 ~ 2012.3
	亀田 佳代子	2010.4 ~ 2012.3

#### 大規模長期生態学専門委員会

委員長	日浦 勉	2010.4 ~ 2012.3
	甲山 隆司	2010.4 ~ 2012.3
	佐竹 暁子	2010.4 ~ 2012.3
	鈴木 準一郎	2010.4 ~ 2012.3
	仲岡 雅裕	2010.4 ~ 2012.3
	中村 誠宏	2010.4 ~ 2012.3
	三枝 信子	2010.4 ~ 2012.3
	大手 信人	2010.4 ~ 2012.3
	正木 隆	2010.4 ~ 2012.3
	柴田 英昭	2010.4 ~ 2012.3

#### 生態系管理専門委員会

委員長	竹門 康弘：河川	2010.4 ~ 2012.3
副委員長	津田 智：草原	2010.4 ~ 2012.3
幹事	西廣 淳：湖沼	2010.4 ~ 2012.3
	村上 興正：自然保護	2010.4 ~ 2012.3
	中越 信和：景観生態	2010.4 ~ 2012.3
	鎌田 磨人：森林・河川	2010.4 ~ 2012.3
	高村 典子：湖沼	2010.4 ~ 2012.3
	西廣 淳：湖沼	2010.4 ~ 2012.3
	角野 康郎：水域	2010.4 ~ 2012.3
	日鷹 一雅：水田・農耕地	2010.4 ~ 2012.3
	波田 善夫：湿地	2010.4 ~ 2012.3
	神田 房行：湿地	2010.4 ~ 2012.3
	國井 秀伸：汽水・河口	2010.4 ~ 2012.3
	佐藤 利幸：高山	2010.4 ~ 2012.3
	矢原 徹一：保全生物学	2010.4 ~ 2012.3
	中村 太士：河川	2010.4 ~ 2012.3

	立川 賢一：海洋	2010.4 ~ 2012.3
	向井 宏：海洋	2010.4 ~ 2012.3
	椿 宜高：個体群	2010.4 ~ 2012.3
	嶋田 正和：管理モデル	2010.4 ~ 2012.3
	長谷川真理子：科学技術政策	2010.4 ~ 2012.3
	塩坂比奈子：普及	2010.4 ~ 2012.3
	逸見 泰久：海洋	2010.4 ~ 2012.3
	山田 俊弘：森林	2010.4 ~ 2012.3
	谷内 茂雄：管理モデル	2010.4 ~ 2012.3
	鹿野 雄一：河川生態学	2010.4 ~ 2012.3
	富田 涼都：環境社会学	2010.4 ~ 2012.3

#### 日本生態学会賞及び宮地賞選考委員会

	辻 和希	2008.8 ~ 2010.12
	津田 みどり	2008.8 ~ 2010.12
	永田 俊	2008.8 ~ 2010.12
	井鷲 裕司	2009.5 ~ 2011.12
	久米 篤	2009.5 ~ 2011.12
	宮下 直	2009.5 ~ 2011.12
	宮竹 貴久	2010.7 ~ 2012.12
	谷内 茂雄	2010.7 ~ 2012.12
	吉田 丈人	2010.7 ~ 2012.12

#### 大会企画委員会

委員長	大手 信人	2008.4 ~ 2011.3
副委員長	榎木 勉	2008.4 ~ 2011.3
運営部会	鈴木まほろ	2007.1 ~ 2011.3
	竹中 明夫	2005.1 ~ 2011.3
	難波 利幸	2005.1 ~ 2011.3
	齊藤 隆	2005.1 ~ 2011.3
	牧 陽之助	2008.4 ~ 2011.3
	市岡 孝朗	2008.4 ~ 2011.3
	嶋田 正和	2008.4 ~ 2011.3
	畑田 彩	2009.4 ~ 2012.3
	長谷川成明	2010.4 ~ 2013.3
	湯本 貴和	2010.4 ~ 2013.3
	椿 宜高	2009.4 ~ 2012.3
広報部会	可知 直毅	2009.4 ~ 2012.3
シンポジウム部会		
	隅田 明洋	2009.4 ~ 2012.3
	半谷 吾郎	2010.4 ~ 2013.3
	榎木 勉	2008.4 ~ 2011.3
	古賀 庸憲	2008.4 ~ 2011.3
	富松 裕	2008.4 ~ 2011.3
	松浦 健二	2009.4 ~ 2012.3
	黒田 啓行	2009.4 ~ 2012.3
	島野 光司	2009.4 ~ 2012.3
	谷内 茂雄	2009.4 ~ 2012.3
	吉田 圭一郎	2009.4 ~ 2012.3

	半場 祐子	2009.4 ~ 2012.3
	森田 健太郎	2009.4 ~ 2012.3
	保原 達	2009.4 ~ 2012.3
	瀧本 岳	2009.4 ~ 2012.3
発表編成部会		
	久保 拓弥	2009.4 ~ 2012.3
	大園 享司	2010.4 ~ 2013.3
	池田 浩明	2008.4 ~ 2011.3
	鏡味 麻衣子	2008.4 ~ 2011.3
	柴田 銃江	2008.4 ~ 2011.3
	松政 正俊	2008.4 ~ 2011.3
	廣部 宗	2009.4 ~ 2012.3
	大澤 剛士	2010.4 ~ 2013.3
	亀田 佳代子	2009.4 ~ 2012.3
ポスター部会		
	関 剛	2009.4 ~ 2012.3
	中野 大助	2009.4 ~ 2012.3
	津田 みどり	2008.4 ~ 2011.3
	関川 清広	2008.4 ~ 2011.3
	及川 真平	2008.4 ~ 2011.3
	松木 佐和子	2008.4 ~ 2011.3
	近藤 倫生	2010.4 ~ 2011.3
(高校生ポスター担当)		
	山村 靖夫	2009.4 ~ 2011.3
	広瀬 祐司	2009.4 ~ 2011.3
	中井 咲織	2009.4 ~ 2011.3
	久保田康裕	2009.4 ~ 2011.3
	浅見 崇比呂	2009.4 ~ 2011.3
	嶋田 正和	2009.4 ~ 2011.3
<b>野外安全管理委員会</b>		
委員長	鈴木準一郎	2010.4 ~ 2012.3
	大舘 智志	2010.4 ~ 2012.3
	粕谷 英一	2010.4 ~ 2012.3
	飯島 明子	2010.4 ~ 2012.3
	森広 信子	2010.4 ~ 2011.3
	山下 直子	2010.4 ~ 2011.3
	湯本 貴和	2010.4 ~ 2011.3
	関野 樹	2010.4 ~ 2011.3
	本間 航介	2010.4 ~ 2011.3



## 京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research  
Kyoto University

京都大学生態学研究センター  
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3  
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201  
センター長 椿 宜高

Center for Ecological Research, Kyoto University  
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,  
520-2113, Japan  
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

### 2010 (平成 22) 年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける2010年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

#### 1. プロジェクト

2007年度から始まったグローバルCOE「生物の多様性と進化研究のための拠点形成—ゲノムから生態系まで—」(研究代表者:阿形清和)(文部科学省研究拠点形成費補助金)、2008年度から始まった「生物多様性を促進する生物間相互作用ネットワーク—ゲノムから生態系まで—」(研究代表者:高林純示)(日本学術振興会先端拠点事業—拠点形成型—)などの大型共同研究が進められている。また、流動連携機関である総合地球環境学研究所との3つの共同企画プロジェクト、地球環境研究総合推進費による共同研究(2件)、科学研究費補助金による研究(23件)、科学技術振興機構の受託研究(2件)も進められている。

#### 2. 協力研究員

引き続き、協力研究員(Affiliated Scientist)を公募する。

#### 3. 共同利用・共同研究事業

2010年度共同利用・共同研究事業として、分野間の交

流や若手研究者の育成の観点から、3件の共同研究、3件の研究集会、3件のワークショップが採択された(次ページに一覧を記載)。開催の日程などの詳細は、センターホームページに掲載する。

#### 4. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度(第三金曜日)センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室(会場への道順は、センターのホームページ参照)の予定である。

#### 5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に3回(7月、11月、3月)発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

#### 6. 共同利用施設

大型分析機器:DNA関係ではDNA多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、水の酸素・水素同位体比分析前処理装置(水平衡装置)とGC/C(ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)を装備した安定同位体比質量分析計MAT252と、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置(元素分析計)を装備した安定同位体比質量分析

計 delta S が稼働している。また新規導入をした、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置（熱分解型元素分析計）、GC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）、LC（高速液体クロマトグラフ付き前処理装置）を装備した安定同位体比質量分析計 delta V も順を追って稼働させていく予定である。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留されている。

シンバイオトロン：ズートロン、アクアトロン、水域モジュールが稼働している。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種

植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤

安定同位体関係：陀安

観測船関係：小坂橋

シンバイオトロン関係：奥田

実験圃場林園関係：大園

## 7. 協議委員会、運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

### 平成 22 年度 共同研究・研究集会・WS 採択申請一覧

申請者	所属	申込内容	研究課題
Chih-hao Hsieh	National Taiwan Univ. Institute of Oceanography	共同研究 a	Effects of climate changes on trophodynamics and energy transfer efficiency in the East China Sea ecosystem
大手信人	東京大学農学生命科学研究科	共同研究 a	安定同位体比情報を用いた森林土壌中の総硝化量の推定
岡崎純子	大阪教育大学教育学部	共同研究 a	人工林化が林床性草本に与える影響：ミヤコアオイ（ウマノスズクサ科）の個体群集構造と繁殖特性の比較
森 茂太	森林総合研究所	研究集会	動・植物機能スケーリングの多様なシフトの生物学的意義とは？
陀安一郎	生態学研究センター	研究集会	International Symposium on Isotope Ecology 2010 in Kyoto: Relationship between biodiversity and ecosystem function
高尾祥丈	福井県立大学海洋生物資源学部	研究集会	International workshop for New Frontier of Microbial Ecology
奥田 昇	生態学研究センター	ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 木曽川
黒川紘子	東北大学生命科学研究科	ワークショップ	植物性質データベースの構築と活用 —種ベースデータからプロットベースデータまで
陀安一郎	生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ

### センター関係者の動き

- 1) 石田厚氏が、4月1日付けで（独）森林総合研究所よりセンターの教授として着任しました。
- 2) 竹内剛氏が、4月1日付けで研究員（研究機関）として採用されました。
- 3) 吉浪理美氏が、4月1日付けで技術職員として採用されました。
- 4) 塩尻かおり氏（次世代研究者育成センター特定助教 5月1日付採用）が、センターで研究を開始しました。
- 5) 川北篤氏が、7月1日付けで京都大学大学院地球環境学堂よりセンターの准教授として着任しました。
- 6) 2010年度外国人研究員（客員教授）の Massimo MAFFEI 氏が6月30日で任期を終え、帰国されました。



## ◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。  
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。  
下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年度内に退会届を事務局まで提出してください。  
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

## 会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布 *	Ecological Research + 生態誌	○	○	
	保全誌		○	○
投稿 **	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員 (選挙・被選挙権)		○	○	○
年会費	正会員	11,000	13,000	5,000
	学生会員	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

\*Ecological Research および生態誌については冊子を必要としない会員への割引(ER 900 円、生態誌 600 円)を行っています。すでに会員の方が今後申請される場合は 2011 年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。

\*\*Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しません。

## 地区会費（正・学生会員のみ）

北海道地区：200 円 東北地区：800 円 関東地区：600 円 中部地区：0 円  
近畿地区：400 円 中国・四国地区：400 円 九州地区：700 円

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8

Tel&Fax 075-384-0250 E-mail kaiin@mail.esj.ne.jp